亀山トリエンナーレ
2022
KAMEYAMA
TRIENNALE

亀山トリエンナーレ KAMEYAMA TRIENNALE 2022 記録誌

亀山トリエンナーレ2022

記　録　誌

亀山トリエンナーレ
2022

目　　次

04　実行委員会より
06　監修：井上隆邦さんの言葉
07　亀山市長あいさつ
09　オフィシャルマップ・イベント等
15　展示作品

- 15　東町商店街
- 29　亀山城周辺〜西町
- 35　加藤家屋敷跡
- 40　旧舘家住宅
- 46　佐野家・照光寺
- 51　亀山市文化会館

55　記録写真

- 55　現地説明会
- 56　リサーチ
- 58　搬入・展示
- 60　南條史生さん
- 61　オープニングレセプション
- 62　亀山トリエンナーレ2022開催中の光景
- 66　搬出・クロージング

68　亀山トリエンナーレ賞・奨励賞
71　イベント・ワークショップ
72　亀山トリエンナーレ2022特別企画①南條史生講演会
76　亀山トリエンナーレ2022特別企画②山形国際ドキュメンタリー映画祭作品上映
78　会期中のイベント・ワークショップ
85　亀山トリエンナーレ2022に寄せて
99　報道
109　広報
114　亀山トリエンナーレ2022開催までの歩み
116　亀山トリエンナーレ2022を終えて（事務局）
118　ご協賛いただいた皆さま、お世話になった皆さま
119　編集後記

亀山トリエンナーレ2022は10月30日〜11月19日に開催されました。
前回の開催は2017年でした。実に5年振りの開催でした。

2020年、2021年とコロナ禍の影響で中止の決断をしたのは本当に辛かったし、残念でした。しかし、ノミネートされたアーティストから「この時間を大切にし作品に反映させます。」との力強いメッセージが届けられ実行委員一同、感激いたしました。

会期中は好天に恵まれて、大勢の来場者にお越しいただきました。
延べ人数で1.5万人くらいかと思います。
開催中は、さまざまなエピソードが生まれドラマがありました。終了後に実行委員会に寄せられた参加作家からの感想が亀山トリエンナーレ2022が地域にどう受け入れられ、感動をもたらしたのかを物語ってくれています。
出展作家であり実行委員の大岡英介さんの言葉です。
「今回、映像展示の電源起動が不具合で何度も加藤家屋敷に行く機会があり、廊下の落ち葉を掃除したり来られたお客様に加藤家の作品を説明したりしていたところ、行く度に地域の方々が何度も見に来られ、嬉しそうに友人や家族を連れて加藤家だけでなく商店街も案内していた。作品は作家の手から離れ、いつの間にか見に来られた方々のものに変わり、地域の方々の誇りになっていた。それは作家と観覧者との境界線を超えて地域の人々が誇れる亀山トリエンナーレの具現化とアートの可能性に少し触れた瞬間でした。コンセプトはそれぞれ違いますが自分の作品だけでなく参加された国内外の作家達の脈々とした作品が集まった事と協力してくれたボランティアの方々、そして地域の人柄が生々しく深く繋がった結果だと実感しました。」

ご協力いただきましたすべての皆さまに心より感謝を申し上げます。
ありがとうございました。

亀山トリエンナーレ実行委員会
代表　伊藤峰子
亀山トリエンナーレ実行委員一同

亀山トリエンナーレ
2022

「亀山トリエンナーレ2022」開催によせて

監修　井上隆邦

前回の亀山トリエンナーレから5年。この間、国内外で予期せぬ出来事がいくつも起こりましたが、こうした厳しい状況にあっても、参加作家の皆さんが作品制作に情熱を傾けられ、亀山トリエンナーレ2022が無事開催できましたことを何よりもうれしく思います。多くの方々にご来場いただき、作品を鑑賞していただき、感謝申し上げます。

今回のトリエンナーレでは、参加作家による展示をメインに据えつつも、新たな試みとして、二つの企画を実施しました。一つは、現代美術の一大拠点である森美術館の前館長、南條史生さんによる講演会です。二つ目の企画は、海外で制作されたドキュメンタリー映画の上映会です。山形国際ドキュメンタリー映画祭で好評を博した作品の数々をお借りし、上映しました。亀山トリエンナーレは、国際交流の推進を一つの目標としてかかげておりますが、上映会を通じて、文化の多様性や、激動する世界の状況、そこで生きる人々の営みを多面的にご紹介できました。

ご承知にように亀山トリエンナーレは、市民主導型の事業です。亀山在住の方々をはじめとして多くの方々のご尽力により、実現しております。展示会場の借用交渉、参加作家との連絡調整、会場設営、広報活動など広範な業務を推進してこられた伊藤代表、森事務局長、そして実行委員の皆さまをはじめとする多くの方々に対して感謝申し上げます。

亀山トリエンナーレでは、若手作家の発掘も重要な目標としております。過去にこのトリエンナーレに参加した人々の中には、国内の著名な映画祭で新人監督賞に輝いた映像作家や、3年後に大阪で開催される万博の一部施設を設計することになった建築家もおられます。今回のトリエンナーレを通じて新たな人材が発掘され、素晴らしい作品が世に送り出されることを期待しています。

三重県内では唯一の公募型現代美術展として始まった亀山トリエンナーレですが、今後、内容のさらなる充実が図られ、地域に根付いた事業として発展することを期待しています。

（元三重県立美術館長・横浜トリエンナーレ2005事務局長）

『亀山トリエンナーレ2022』によせて

亀山市長　櫻井　義之

亀山の秋に彩りを添えていただいた「亀山トリエンナーレ2022」の成功をお慶び申し上げます。

国内外93組の新進気鋭の作家の皆様の個性あふれる作品は、東町商店街と旧東海道の佇まいが残る西町の風致と調和し、市内外からの多くの来場者を魅了する21日間となりました。

とりわけ、今回新たな現代アートとして披露されたダンス等のパフォーマンスに加え、現代美術分野で数多くの優れた展覧会を手掛ける森美術館・前館長の南條史生様をお迎えし、豊富なご見識に裏付けられた講演会や、国際的にも注目されている山形国際ドキュメンタリー映画祭受賞作の上映など、より進化した現代アートの祭典が、人々の交流を促進させ、まちを活性化させる機会となりました。

コロナ禍により2度の延期を余儀なくされた亀山トリエンナーレですが、それすらも充電期間とし、実に第1回「アート亀山」の開催から15年、以来、現代美術の祭典をこの地に根付かせてくださいました伊藤峰子代表・森敏子事務局長はじめ実行委員会と企画・監修の井上隆邦様の大所高所からのご指導に心から敬意と感謝を申し上げます。

結びに、今後も「亀山トリエンナーレ」が皆様の英知と更なる進化により一層のご発展をいただきますとともに、ご参加いただきました作家をはじめ関係者の皆様方の今後ますますのご活躍とご健勝を心よりお祈り申し上げます。

亀山トリエンナーレ
2022

2022
10.30-11.19◎10:00-17:00

KAMEYAMA TRIENNALE 2022

official map

KAMEYAMA TRIENNALE 2022

2022.10.30–11.19◎10:00–17:00◎最終日は16:00

東町商店街×旧東海道沿い建造物×亀山市文化会館

official map/program

空洞化していく商店街、視点を変えれば地域資源ではないのかと気づいたのが2006年のことです。「アートによる街づくりを考える会」を結成し2007年に空き店舗を借り、週末だけ、作品展示をして今後の構想を練りました。この経験を力に2008年から2013年まで「アート亀山」の名称で毎年、現代アートの芸術祭を催し、2014年よりトリエンナーレ形式としました。2020年はコロナ禍により延期、2022年に開催の運びとなりました。数々の問題が噴出しましたが何とか乗り越えることができ、今年は国内外の93組のアーティストの作品が街に展示されます。「亀山宿」は東海道46番目の城下町、宿場町。今も往年の歴史文化が色濃く残っています。「場」と「作品」を楽しみながら亀山を歩いていただければ幸いです。そして、現代アートが媒体となって住む人、訪れる人、表現する人の心が通い合うことを願っています。

亀山トリエンナーレ2022実行委員会一同

It was in 2006 that we realized that the shopping district was hollowing out, but once we changed our perspective, we realized it might be a chance to revitalize the area. We rented a vacant store in the shopping district and exhibited the works on weekends to get the public's opinion in 2007. Taking advantage of this experience, we held an contemporary art festival every year under the name of "Art Kameyama" from 2008 - 2013, and from 2014 onwards it became a Triennale, but was postponed in 2020 due to the Coronavirus pandemic. The next festival will be held in 2022 instead.

Many problems have sprung up, but we managed to overcome them, and this year, the works of 93 domestic and foreign artists will be exhibited in the city. "Kameyama-juku" is the 46th castle and post town on the Tokaido. Even now, the historical culture of yesteryear remains strong. We hope that you will walk around Kameyama while enjoying the "place" and "works". We also hope that contemporary art will be the medium for people who live, visit, and those that wish to express their art in Kameyama.

Kameyama Triennale 2022 Executive Committee

パンデミックで延期となった亀山トリエンナーレですが、2年遅れとは言え、無事開催できることを大変嬉しく思います。ただ、海外から参加予定であったアーティストの中には、その影響により来日が叶わない人もおり、この点は残念でなりません。今回の亀山トリエンナーレ2022では、その充実を図るべく新たな事業を追加しました。現代美術分野で数多くの、優れた展覧会を手掛け、国内外で高い評価を得ている森美術館・前館長、南條史生さんによる講演会がその一つです。また国際的にも注目されている山形国際ドキュメンタリー映画祭の協力を得て、同映画祭での受賞作の上映が実現したことも新たな試みと言えるでしょう。映像表現の重要性を念頭に置いた企画です。亀山トリエンナーレは新人の登竜門と国際文化交流の促進を目標としています。今回のトリエンナーレを通じてその目標が着実に達成されることを期待して止みません。

企画・監修　井上隆邦

In spite of being delayed for two year due to the pandemic, I am delighted that the Kameyama Triennale is now able to be held. At the same time, it is unfortunate that the pandemic has meant that some people who had been planning to participate from overseas have not been able to make the journey to Japan.

This time, we have included some new enriching projects in "Kameyama Triennale 2022." One of these is a lecture presented by Mr. Fumio Nanjo, former Director of the Mori Art Museum, who has presented numerous exceptional exhibitions in the field of modern art which have been highly appraised both in Japan and overseas.

Another is, with cooperation from the Yamagata International Documentary Film Festival which has been receiving a lot of attention from overseas, the successful release of an award-winning film at that same festival. This is an enterprise which places visual expression at the forefront of importance.

Kameyama Triennale seeks to provide a gateway to new horizons for first-time artists, as well as facilitate international cultural exchange. I can't help but be filled with the expectation that this will be firmly achieved through this year's Triennale.

Takakuni Inoue Supervisor Kameyama Triennale

■ event

＜スケッチ｜亀山モンマルトル＞

11/3（木・祝）◎10:00～（雨天11/6）

会場｜亀山市内一帯○自由参加○参加費無料

受付｜亀山市市民協働センター○画材は各自で準備

＜パフォーマンス｜QuabalaQuabala「追憶の子守歌Lost Memories」＞

11/3（木・祝）◎15:00～16:30

会場｜亀山市文化会館コミュニティセンター◎入場無料

＜ダンスパフォーマンス｜辻将成「DUALITY2022KAMEYAMA」＞

11/6（日）◎13:30～、17:30～

会場｜亀山市文化会館コミュニティセンター◎入場無料

＜大道芸｜フォトジェニックドールエトランゼ＞

毎週土日曜日○11/3（木・祝）◎11:00～15:00

会場｜東町商店街一帯

＜ライブ｜ポンティ新平＞

毎週日曜日◎13:30～16:30

会場｜東町ふれあい広場

＜ライブペインティング｜宮崎政史「guitar painting」＞

10/30（日）◎13:00～17:00

会場｜高村倉庫

＜ライブペインティング｜波多野友香＞

10/30（日）◎13:00～17:00

会場｜おもちゃのナカヤ

＜光とダンス｜辻将成＞

11/12（土）◎16:30～

会場｜東町ふれあい広場

＜パフォーマンス｜タキナオ「映像と身体によるパフォーマンス」＞

11/13（日）◎16:30～17:00

会場｜阿部家

＜演奏パフォーマンス｜長谷部勇人「イチョウの古琴」＞

11/19（土）◎13:00～16:00

会場｜加藤家屋敷跡

■ contact

亀山トリエンナーレ事務局（森）

〒519-0137 三重県亀山市阿野田町1060

Tel ○090-8950-3011

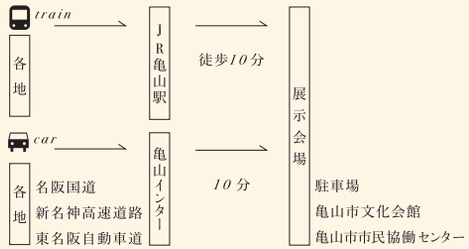
Mail ○artkameyama@gmail.com

亀山市市民文化部文化課文化創造グループ

Tel ○0595-96-1223

Mail ○bunka@city.kameyama.mie.jp

■ access



■ special event

＜講演会｜南條史生（森美術館特別顧問）「ローカルとグローバル：ビエンナーレと芸術祭」＞

10/30（日）◎14:00～15:30

会場｜亀山市文化会館コミュニティセンター○講演会＆トーク◎入場無料

＜山形国際ドキュメンタリー映画祭（別表参照※）＞

会場｜亀山市市民協働センター2F◎入場無料

■ workshop

＜「妖精の住む森で妖精のお家の扉を作ろう！」ピカソスイッチ＞

11/6（日）◎11:00～、14:00～（雨天の場合は市民協働センター）

会場｜東町ふれあい広場　参加費1000円

＜学校ワークショップの作品展示「Milagro−奇跡×軌跡−」｜矢作隆一＞

会場｜加藤家屋敷跡

亀山市立東小学校＋亀山高校美術部＋アトリエエビの作品展示

■ food&shop

＜Café@亀山＞

喫茶TESORO｜あんらく｜Amie｜いなべカリー食堂｜しゃむ猫庵｜BECK COFFEE LOUNGE｜moguraya｜HOABINH TABLE｜やまなみベーグルなど

（土/日/祝日）◎11:00～15:00

会場｜東町ふれあい広場

＜公式グッズ販売（期間中）＞

10:00～17:00

会場｜しぼりや○森本薬品

アクセサリー、クリアファイル、和菓子、パーカーなどの販売

※ご来場にあたってのお願い

- ●諸事情により展示場所の変更、あるいは中止の場合があります。
- ●店舗での展示は定休日には鑑賞できない場合があります。
- ●各自のゴミはお持ち帰りください。
- ●作品や壁、展示ケースにはお手を触れないでください。
- ●会場の混雑状況によっては、入場をお待ちいただくことがあります。
- ●入館（旧加藤家住宅/亀山市文化会館）時の検温により、37.5℃以上の発熱が認められる方はご入館をお断りいたします。
- ●マスクの着用、こまめな手洗いや手指の消毒にご協力ください。
- ●他のお客様との距離を取ってご鑑賞ください。
- ●会場内で体調が悪くなられた場合は、お近くのスタッフまでお申し出ください。

主　催　亀山トリエンナーレ実行委員会

企画○監修　井上隆邦

事業協力　亀山市

助　成　（公財）岡田文化財団○エア・ウォーター株式会社

後　援　亀山市東町商店街振興組合○（公財）亀山市地域社会振興会
亀山商工会議所○（一社）亀山市観光協会
山形国際ドキュメンタリー映画祭

※山形国際ドキュメンタリー映画祭タイムテーブル　●11月

作品名	1 火	5 土	6 日	11 金	12 土	13 日	18 金	19 土
自画像：47KMの窓（中国）		15:30						11:00
気高く、我が道を（イラン）	15:00		13:00					
祖国-イラク零年（イラク・フランス）					10:30		12:00	
殊勲十字章（アメリカ）	16:15		16:00					
阿仆大（中国）				15:00		15:00		

TICKET
旧舘家住宅○加藤家屋敷跡のみ有料○共通券500円
旧舘家住宅で販売

詳細はホームページでご確認ください。 Google Map

主な展示会場 | A 加藤家屋敷跡 B 東町商店街 C 旧舘家住宅 D 亀山市文化会館

＜展示会場　アーティスト＞

① 亀山市市民協働センター
大河原愛/森敏子

② 高村書店倉庫
宮崎政史

③ ベルハンター亀山スズキ
園田源二郎

④ シャトー
オノ・ミチ・ヒロ

⑤ 法因寺
丹羽巧

⑥ 元はんの清水
井谷うらん / 河野展成

⑦ プランタンさかきや
伊藤明淑

⑧ 元写真のトヨダ
倉岡雅

⑨ 森本薬品
土方英俊

⑩ 化粧品のなかや本店
原憲太郎

⑪ 原田帽子店
森博幸

⑫ おもちゃのナカヤ
波多野友香

⑬ 阿部家
タキナオ/symbi/寺本美穂/山田風雅

⑭ JDスタイル
市川雄康

⑮ トヨダ倉庫
Dr.M

⑯ 肉のむかい
西口武延

⑰ 元丹波屋
中澤隼人

⑱ 元中村こんにゃく店
Polymorphia/五月女かおる

⑲ 東町ふれあい広場
フォトジェニックドールエトランゼ/
ピカソ・スイッチ/ポンティ新平

⑳ 高橋家シャッター
オノ・ミチ・ヒロ

㉑ 小林㊨時計舗
伊賀上良太○伊賀上浩美/キムテボン

㉒ 喫茶佳
倉岡としえ

㉓ 高村書店
稲田和巳

㉔ 元アートスペース kusukusu
Suyeon Na

㉕ しぼりや
阪本結/辻將成

㉖ 崖の上 古民家
いしかわゆか/澤田奈々○ヘイグ・エリオット/
KAO'RU shibahara

㉗ 青木倉庫
櫻井大吾

㉘ アーケード
藤田昌久

㉙ 山形屋酒店
iwata mayuko

㉚ 三村家
堂本清文

㉛ 行在所
にしようこ/長縄功太郎/鈴木幸永

㉜ 遍照寺
木村翔太×佐々木樹/
宮嵜浩(BOMBRAI WEST)

㉝ 元ユリ理容院
鮫島弓起雄

㉞ 廣森家
計良明子

㉟ 元橋爪種苗店
Cake Hara

㊱ 岡田屋本店
小野功太郎/藤原史江

㊲ 西ノ丸庭園
森本紗月/山本辰典

㊳ 加藤家屋敷跡
上光陽/大岡英介/木村剛士/永井寿郎/長谷部勇人/Jorge Ismael Rodregez/大㐂成未/カトウマキ/大井バベル/矢作隆一/奥田誠一

㊴ 旧舘家住宅
浅野言朗/石山あゆみ/稲垣美侑/荻野良樹/花とミサイル河野麻希/小寺貴也/齋藤華奈子/平田万葉/森本紗月/白水ロコ/中谷ゆうこ/Megu Fukuda/松岡歩未/森島里香/Hector Falcon/Omar Torres

㊵ 佐野家
篠藤碧空/Hector Falcon/Natsuki Takauji/Christopher Ketchie/Daniel John Gadd/Etty Yaniv/Xiaowei Chen/Omar Torres
小林園実/William Norton/Yukari Edamitsu

㊶ 照光寺
三本木欽

㊷ 亀山市文化会館
Quabala Quabala/田島悠史/辻將成/
内藤久嗣/田村公男

展示作品

東町商店街

亀山トリエンナーレ
2022

大河原愛

鼓膜に残る静寂を優しさに変えるすべについて

今回の作品は、世界に平穏な日々が訪れることを願って制作しました。多くの人々にとって与えられた情報から正確な事実を受け取り判断することは時に難しいように感じられ、その葛藤をもとにイメージを構築しました。

森敏子

WABI SABI

その場所を通る度に、白い鉄板に浮き出ている錆びの流れを美しいと感じていた。その錆びが浮かんだ鉄板の表面に私の作品で、再度、酸化還元反応をおこした。

宮崎政史

ギター絵画

息子二人も参加し、絵を描きました。
長男は、左右違う色の靴を履き、
「アーティストになりたい」
と言っていました。

とても充実した日々でした。

園田源二郎

空間句集　かめやま
「　絵はうたう　」

「時の交差点」
作品は鈴木ご夫妻の温かなまなざしを受けて躍動し、来店されるお客様との対話で彩りを増してゆきました。
作品の面影が小さなともしびとなり、ご夫妻をそっと照らす瞬間があればと願います。
本当に有難うございました。

オノ・ミチ・ヒロ

MASK

シャッターと鏡にクマの面をはりつけた。商店街の中に溶け込みたかった。昔や未来、身近な現実や大きな社会の流れが交差するものにしたかった。ちょっと入り込めて楽しめ、SNSで少しつながれるものにしたかった。

丹羽巧

横たわるクモ

たくさんの人に作品を見ていただけたこと、このような機会をいただいたことに大変感謝しております。
この経験を今後の作品制作に生かしていこうと思います。

井谷うらん

Sentimental Jeans

心を痛める戦争の勃発で、ジーンズを軍服にはきかえ自由を奪われた若者や 銃弾に逃げまどう罪のない子どもたちが、一刻も早く、ジーンズをはいて、青空の下で自由な未来への道を走っていける様に心から祈ります。

河野展成

ACCORDING TO A LOGIC THAT DOES NOT BELONG TO US

亀山市の「市の木」であるスギが不可思議な進化を遂げ、人間がそれと共存することができなくなった未来、という設定を通して、種々の非-人間的な存在の自律性や、非-人間中心主義的なリアリティの探求を行いました。

伊藤明淑

生きる

自然と人間の移り変わりの揺らぎの世界をシルクスクリーンの上に彩色したり彩色上にシルクスクリーンを重ねたりで、試行錯誤を重ねて表現している。それを自己の作品の色彩に埋もれさせている。

倉岡雅+瀧本麻須美

写真の眼・絵画の眼

同じモデルから、絵画(木炭デッサン)と写真、それぞれ異なる手法で、またそれぞれの視点から表現したコラボ作品です。
今回は、亀山市にゆかりのある人物がモデルです。その中に自分たち二人も入れて作り上げました。

土方英俊

《星化粧/Gold
ミモザと火薬ボトル、松毬》

私の作品はスポイトで１滴づつ垂らした無数のアクリル絵の具の雫で出来ています。今回の展示では、隣の椅子にミモザを投げ入れた散弾銃の火薬ボトルを配し、足下には松毬を散らしました。

原憲太郎

kameyama rouge

写真は常に過去である。過去は痕跡となり、積み重なり記憶になる。記憶は曖昧で不確実にも拘らず、イマージュに悪戯をする。2019年秋から2021年夏にかけて亀山で撮影した写真をもとに構成したインスタレーション作品。

森博幸

VS

原田帽子店さんとプロレスの歴史に思いを巡らせながら空間を組み立てました。時代と向き合いながら、時には戦いながら、それぞれが作り上げてきた時間の一片を、今回の展示で感じ取ることができたら幸いです。

波多野友香

幼年期の終わり

会期前からお世話になり、恩返ししたい！と思い、初日にライブペイントを実施。ナカヤさんは会期中も「中にも作品ありますよ」と来場者様にお声掛け下さり、亀山を象徴するような優しいお店。展示が出来、幸せです。

タキナオ

影の鼓動

タキナオ(映像)とmarucoporoporo(音楽)による、生命の誕生にまつわるイメージを共有し制作した映像作品と、オブジェからなる空間。カジヤマテルヨ(ダンス)を迎えたパフォーマンスも行った。

symbi

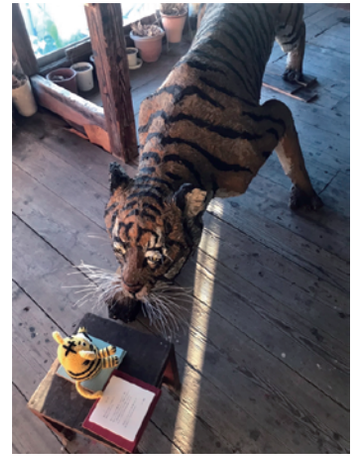
淡い、良い夢を。

この作品は「心の在り処」をテーマとし、この場所に宿る"何か"を"彼女"として表現した。
“彼女”は、日常の様々な柵から逃避するために心を置いていった。“彼女”を取り巻くカゲロウは、弱々しさや儚さを彷彿とさせ、また、幾度も脱皮を繰り返す生態が、“彼女”の姿と重ね合わせて見える。

寺本美穂

たゆむまち. に

床の間。大きな窓からの光。
その雰囲気に合うような工夫が必要だと感じました。
イメージ通りの額縁とぴったり合う写真が巡り会い、
長い年月阿部家に存在してきたかのような展示ができました。



山田風雅

君も私？

編みぐるみはここにお住まいのお婆さんがつくられました。
阿部さんは以前、作品に編みぐるみを添え撤去されたと知り、これを使って作品にしたいと思いました。
『作った編みぐるみを見てもらえる。』と、とても喜んでいただきました。

市川雄康

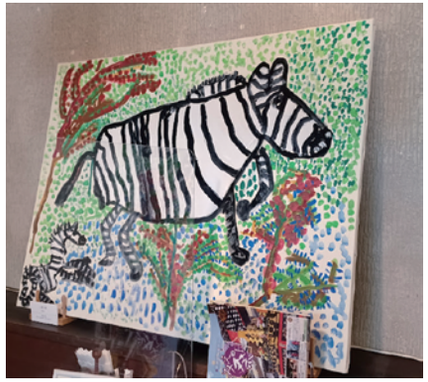
つつみ

お洒落なJDスタイルさんで、「装い・粧い」をキーワードに、亀山のどこか懐かしい旧街道の時間経過をテーマとしました。

Dr.M

Dr.M研究所

Dr.M研究所は障害者施設NPO法人希望の園の作家Dr.M（田中雅士）と職員3名のチーム。
Dr.Mには手足の機能と言語に障害がある。「福祉施設から生まれるアート」をコンセプトに展示した。



西口武延

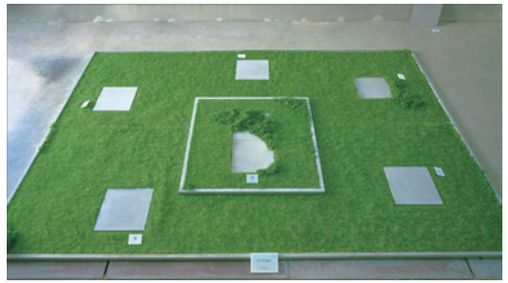
Takenobu's World

西口さんの作品を通して大勢の方にアールブリュットに触れていただけたことは支援者として大変喜ばしいことでした。彼の大胆な色使いと表情豊かな生き物たちには「毎日を楽しく生きていく！」という強い生命力が宿っています。

中澤隼人

海を見つめて

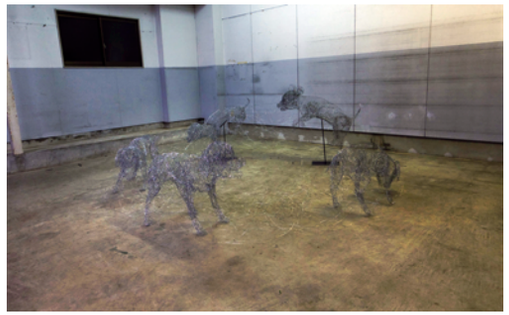
施錠されて中に入れないという場所性を利用し、見えるけど触れられない、だけど確かにそこにあるという作品を作りたいと思いました。
イメージは伊勢神宮をベースにし、三重の内陸から海を眺めることに掛けています。



Polymorphia

untitled

この作品はダンテの7つの大罪を現代の生活音で描いたサウンドインスタレーション作品です。7つのサウンドスケープは、それぞれ、一連の日常的な行為の一コマの中をループし続ける人を描く構成になっています。



五月女かおる

行ったり来たりする犬の手を引く

「歩く」という行為によって場所、環境が体に馴染んでいく感覚を、同じ場所を散歩し続ける飼い犬（あるいは帰る場所を見失い彷徨う飼い犬）の姿と重ねて表した。

フォトジェニックドール エトランゼ

You make me Happy
～あなたがいるから　私は幸せ～

11月3日に開催された亀山モンマルトル。
亀山が絵描きの街に!!
たくさんの絵描きさんたちが思い思いの場所で自由に絵を描いて楽しまれていました。
エトランゼは可愛い絵描きさんたちのモデルになりました♡

Picasso.switch

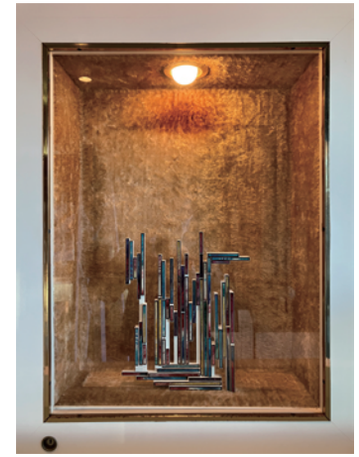
妖精のすむ森

誰もが知っているのにその存在が曖昧で危ういものに人は多くのイマジネーションをかき立てられる、そういったことには大人も子どもも変わりがない。「妖精の扉」は日常に紛れ込む想像（創造）へのスイッチである。

ポンティ新平

妖精様ご用達ライブハウス “ロフトロフト亀山”

妖精と人間の違いってわかりますか？それは争いがないこと。ライブハウスロフトロフト亀山でたっぷり楽しんだ妖精たちは、一人一人の心が平和になること願いつつ「ありがとう」と、また次の場所へと旅立ちました。



伊賀上良太○伊賀上浩美

Untitled 936,937,938,939,940,
941,942,943,944,945,946,947,948,949,950,
951,952,953,954,955,956,957,958,959,960,
961,962,963,964,965,966,967,968,969,970,
971,972,973,974,975,976,977,978,979,980,
981,982,983,984,985,986,987,988,989,990,
991.

とても雰囲気の良いお店です。
キム・テボンさんと共に、この雰囲気に惚れ込み作品を店舗の一部の様に展示出来るのではないかと考え展示させて頂きました。

キムテボン

Moon Walker

地球から月まで約38万4400km。歩くと約4億9577万6101歩。数字を見ると意外にも現実的な距離な気がして、月まで歩いていけたらなと思ってしまう。町の時計店のチクタクと刻まれる時間とともに歩きます。

倉岡としえ

My space -break time-

カフェで一息、そんな当たり前の日常が戻ることを願い、喫茶「佳」さんの一杯のコーヒーへの想いを込め”break time”をテーマとしました。そして、この先も亀山東町の憩いの場であってほしいと願ってます。

稲田和巳

潮（亀山）

亀山市の人口分布統計から仮想の地形を生成し、地理空間に横たわる不可視な流れを考察することに取り組みました。データの上でにじみ、溶け出し、広がっていく粒子からは、社会のどのような潮流が見えるでしょうか。

Suyeon Na

Dream of Four Seasons

亀山トリエンナーレで世界中からの作家たちと交流できて良かったです。亀山地域の歴史が生きている空間を活用した作品からアーテイストとして多くのインスピレーションを受けた、すごく素晴らしい経験でした。

阪本結

PrivateUniverse

洋服屋さんの店舗をお借りして、飼い犬のムックさんの散歩コースを取材して作成した商店街のフォトコラージュから描いた絵とドローイングを展示させていただきました。

いしかわゆか

おもいで

「記憶」を追憶、昇華、埋葬するため、躍動する情緒を造形に落とし込む。「崖の上」に生まれた沢山の記憶を並べてみた。形も大きさもそれぞれ違う、美しく愛おしい記憶たち。

(切り絵・ポリエステルフィルム、UVレジン)

Elliott Haigh + Nana Sawada

The Construct of a Forgotten View

常滑にひっそりと佇む篭池古窯にまつわるこの作品はその周りに生い茂る雑木林の樹皮を常滑の粘土を用いて型取ったものです。中世古窯の形態を良く保っている篭池古窯の過去と現在、未来を思いながら制作しました。

KAO'RU shibahara

崖に集う　精霊。

歴史のある土地には、長い間その場所を守り続け、その為には人間の理解を超える現象を起こす不可思議な力を持つ存在がいる。
亀山の崖の上はその精霊達が集まる場所である。

櫻井大吾

光のゆくさき

隕石の岩肌のようなゴツゴツとした質感の下地に、レーザーを照射し、その焦げ目と切れ目で作品が誕生します。
到底手作業では描けない、緻密な線で仕上げた作品です。

藤田昌久

版画で街めぐり

アーケード内で見た物、風景を版画にし、その場所に展示。作品が風景に溶け込み一体となるような感覚を持っていただけるよう、今までにない試みをしてみました。また、チャンスがあれば挑戦したいと思います。

展示作品

亀山城周辺〜西町

iwata mayuko

Dried Nonfiction

お酒の起源は幻覚剤としてシャーマニズム文化と共に始まったという説があります。解放された自我の中で制作した酒の肴『スルメ』。
亀山の地酒『浮紅葉』を飲酒しながら制作した、実験的な珈琲ドローイング作品です。

堂本清文

psychedelicART “琇・游・逢”

この場所は亀山城二の丸の外郭、姫垣外苑東側です。太古の人々も、現代人もクツロギ、出会い、交流の場をイメージしてこのベンチを作製しました。この場所でpsychedelicな出会いがありますように。

にしようこ

かたち

亀山を行き交う今昔の人々が感じたものそのものを、時を超えて互いに享受する心意気でいれば、未来永劫にわたり私たちの旅が豊かに繋がって行くのではないかと希望を胸に制作させて頂きました。感謝申し上げます。

長縄功太郎

和敬清寂

城壁の前での展示。2022.02.24に始まったロシアのウクライナへの侵攻。同じ空の下で、戦火に怯えながら暮らす人々。歴史の流れの中で揺れ動く世界情勢。今できること、表現できることを作品にしました。

鈴木幸永

創造表象としての人体の不思議

身体の不思議のひとつに、例えば、寒い冬・暑い夏、満腹・空腹にかかわらず、動物の内部環境が一定に保たれているということがあります。この安定を維持するためには、身体の衛生と精神的平静を保つことが重要です。
本展では想像表象として、人体の不思議を表しています。

木村翔太×佐々木樹

亀になり、足跡を残す

ー木村翔太がアーティストになるまでの出来事を回想する

本展示は、遍照寺の屋根瓦にある「亀」から着想を得た彫刻作品『二年かかって亀、辿り着く』と、亀山のシンボルカラーを模した「山」の中に投影される映像記録『山の途中で - 木村翔太との詩的交感』で構成しました。

宮嵜浩(BOMBRAI WEST)

Center of the universe

「灯り」をコンセプトに作品を設営し、遍照寺に奉納させていただきました。遍照は、「遍(あまね)く照らす」という意味があります。
この作品と出会った人が遍くそれぞれの「灯り」を感じてくれればと願います。

鮫島弓起雄

モノクローム -ユリ理容室-

閉業した理容室の一部分をモノクロームに変換した作品。
営業当時に使用されていた商売道具やソファ、雑貨、木目調の壁やその壁に掛けられていた切り絵など、その場にあったものをそのまま白黒調に作り替えている。

計良明子

The Basket Maker 2022

廣森家がかつて籠屋を営んでいたということから、現在の籠屋をイメージしました。街道沿いの場所を活かした作品を目指し、歩きながら時間的•地理的な距離やゴミ問題等を感じてもらえればと思いました。

Cake Hara

壱万八千二百

1945: 231920
0-4≒18200

小野功太郎

field of iris

亀山市の市の花である菖蒲の花をモチーフにして平面作品を制作しました。自分は亀山で生まれ育ちました、その亀山市にこれから発展していってほしいという思いを込めました。

藤原史江

名も無き物から見た亀山

亀山の町に落ちていた物から見た風景です。黒板にチョークで描く要領で黒いサンドペーパーに、落ちていた物で描かれています。小石や椿の種殻から見た亀山の町がそれぞれ小石や種殻の色によって描かれています。

森本紗月

投影

始まるまでがとても長かったので終わってみると一瞬だった気がします。
その期間のなかで、通り行くひとが私の作品に何かを見つけてくれれば幸いです。
ありがとうございました。

山本辰典

亀山のお話し

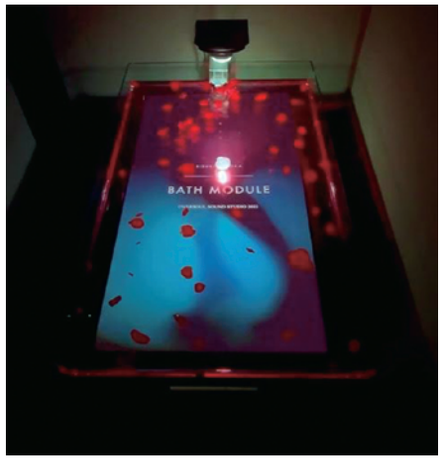
展示作品

加藤家屋敷跡

上光陽

「現風景–亀山市の統計から–」
Landscape that appears –From statistics on Kameyama City

亀山からは鈴鹿山系の稜線が綺麗に見える。その景色の元には人々の日々の暮らしがある。人々に関わる数字、統計で出来るグラフの線を稜線に見立てる。人々の日々の営みから風景が現れてくる。



大岡英介

Module Bath

昭和初期、次世代に引き継ぐ為に結婚はとても重要だった。現代の様に恋愛をして結婚できる事はなく父親や長男が娘の相手を決めた時代。亀山藩石川家 家老職の加藤家の地位から一般の家庭に嫁に行く事になった娘が苦悩の中、最後の夜に現代的なバスルームにて嫁ぐ苦悩と決意の様子を映像で表現。

木村剛士

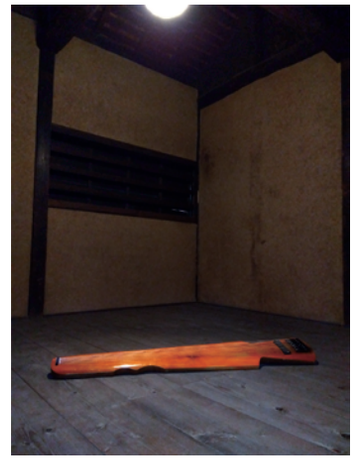
人と庭

ビジネスホテルの朝食で、ミネストローネスープかと思って飲んだらトマトジュースで、思わず吹いたことがある。同じくこの作品は「壺」のようで「茶碗」である。設置している場所も庭であるが亀山の一部でもある。土地に作品を置くということはそういうことなのかなとか思っている。

永井寿郎

亀山のうつわに空を集める

「世界は誰かにとっての『特別な場所』が集積して出来ている」加藤家男部屋という歴史深く閉塞感のある空間から、亀山市民の助力を以て上記メッセージの発信を試みた。世界は多様性を保ちつつ美しくあるべきだ。



長谷部勇人

イチョウの古琴

この場所には太いイチョウの樹木があり、長い時間の経過を感じさせます。そのひと時でも、風に揺れる葉の音に交じって楽器の音が聞こえてくるようなイメージを思い描き、自作の琴を制作しました。

Jorge Ismael Rodrigues

Living room be to be

I am very happy to share my work in the Kameyama Triennale 2022, because in this art event I see very good works of very diverse artists and a great loving and human effort in its organization. Thank you and congratulations to the organizers.

大槁成未

境

"要"と"不要"の"境"として題をつけました。捨てられた木々を"積み上げる"動きで"要"にする反面、"不要"と判断された理由があります。その"境"を意識せねばならないということを表現しました。

カトウマキ

HARMONY

亀山出身の飯沼慾斎さんのように雑草を丁寧に描く事により、雑草の温かな思いを描き表せないか試みました。雑草を描く時間は、癒され心が満たされます。飯沼慾斎さんも温かな思いになったに違い無いと想像します。

大井パベル

Border

アメリカ大統領による「壁」建設、パンデミック。そしてロシアによるウクライナ侵攻。こういう 時代だからこそ国境をテーマにした作品『Border』を亀山トリエンナーレに出展できてよかった と思う。

矢作隆一

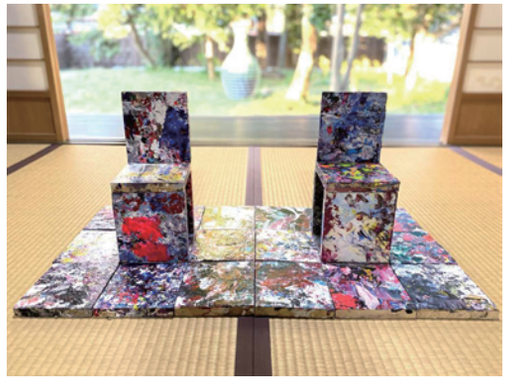
Milagro -奇跡×軌跡-

メキシコの死者の日をモチーフに亀山東小学校、亀山高校、アトリエエピの子供達がメキシコの新聞と地元紙を使って骸骨の張り子を制作、背景には聖母グアダルーペや近年の福島県富岡町を撮影した写真を投映した。

奥田誠一

sealed [封]

加藤家屋敷跡に立ち、そこでの武家の生活に思いを馳せる。今は更地となれど、その「場」には、建物の痕跡のみならず、人々の存在した時間が、大地に編み込まれるが如く、封じられているように感じた。



Chris Ketchie

Mother and Father

I make paintings and sculptures about my life. My experiences are what I know and that is what motivates me. I have spent time in Japan and have had many profound experiences and it has directed my work for many years. When making my piece for the exhibition I wanted it to exist in harmony with the surrounding and make a simple statement about life.

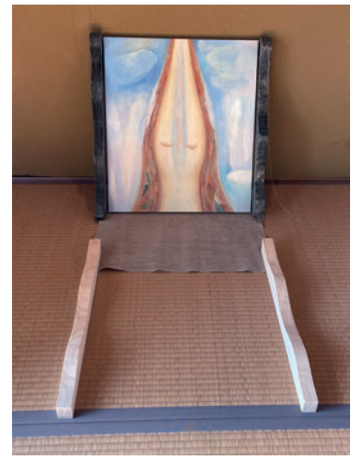
展示作品

旧舘家住宅

浅野言朗

仄暗い部屋

継続的な主題としている絹糸を用いた作品。旧舘家２階の最奥の仄暗い和室にて、割った器に絹糸を巻いて畳の上に散りばめた。器の破片と絹糸の組み合わせは、散り行く花弁のような妖しい光沢を放ち、和室空間を引き立たせる。



石山あゆみ

誰かの望景 / 往来

稲垣美侑

草木、踊る坂

制作を通じて亀山を訪ねるようになり、今年で早10年が経った。
遠くに霞む山々、坂を転がる葉、崖から望む家々、古くより人の行き交う道と足跡。
この町では今日も心地よい風が通り過ぎ、坂と共に歩みを進める。

荻野良樹

土のにおい

土のにおいとそれらを廻る循環

齋藤華奈子

はじまりのすきま

花とミサイル河野麻希

庭園の主（遠景）

パンデミック下で行われた亀山トリエンナーレでは作家と来場者は類似した状況にあり、悲しみや葛藤などを共有できる者同士となった状態で出会った。それ故両者の境界は曖昧に溶け合い、いくつもの共鳴を呼び起こしたのではないだろうか。

平田万葉

unlimited

今回亀山の茶畑の土を素材とし、舘家の倉庫や茶畑で使われる道具からカタチをイメージしました。セラミック領域における一度窯の中にいれることで起こる“ 時間の可視化 ”と亀山でモチーフにしたモノのカタチと時の移り変わりに、共通点を見出し制作しました。

小寺貴也

民藝

作品を作る人の私が日々思うことを民藝文化と照らし合わせた作品です。
モノを作って生きる事、作品と商品、まだ若手である私が日々考えている事を登竜門を掲げる亀山トリエンナーレで形に出来たら面白いのではと考えました。

白水ロコ

地底湖

京都の地下には、琵琶湖を水源とする巨大な地底湖が存在すると聞いた。目にする琵琶湖はいつも眩しく輝いているが、地底湖には色も無く、生きていた者達の残像が漂っている。私達の命は一瞬のものだが、宇宙の欠片から生まれたその姿は、奇跡的に美しく、夢か幻のようだ。

中谷ゆうこ

shadow

輪郭をとかす事で囲まれ限定された形や色を無限へと解き放ち、原始の時へと遡りたいと思っている。今回は旧舘家住宅の内階段や通り土間とのコラボレーションを行い、時空を超えて光や空気を表出させようと制作した。

Megu Fukuda+Lilly

Chihako@NYC

I know there is power in creating physical, visual, representational experiences for viewers. I know there is even greater power when the thinking of artists and viewers are connected by art.
I will continue to create art with a purpose of exploring the human condition while discovering more of myself and others.

生まれてくる者、死んでいく者
色々な事が起こったこの二年間
今日の大切さ、何が起こるかわからない明日、、
色々な人のお力で、娘との初コラボが実現し、歴史ある旧舘家の雰囲気を活かした展示となりました。

松岡歩未

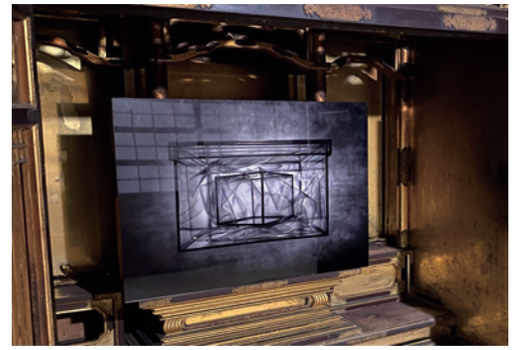
めぐる

この棺に入る予定だったのは 5 年前に亡くなった祖母でした。翌年、後を追うように祖父も他界した。そして息子が生まれた。誰かの生まれ変わりとして。

森島里香

湧き出す世界

この作品は2022年、春に拠点を移した後制作しました。日々の自然の声、空気など変化する世界を身体で受け止めています。そんな日々の変化の湧き出す世界を描いていきます。



Omar Torres

Soul / Alma

I feel very grateful to participate this Kameyama triennale 2022. It is very emotional to see a large part of the city participating and visiting.
without a doubt I will show my new projects for 2024, thanks to the curators and committee for their effort and dedication this year.

展示作品

佐野照光寺

篠藤碧空

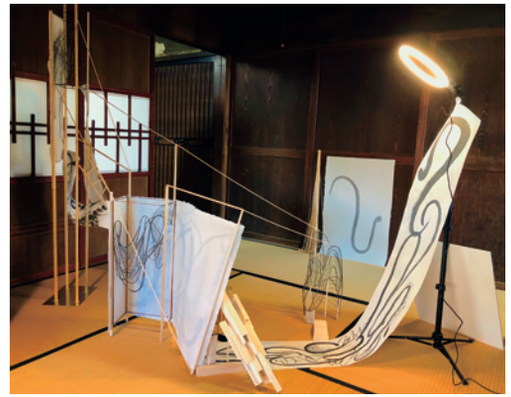
Skullpture (Stand)

2019年以降、人命を脅かす出来事が世界規模で立て続けに起きた。
死は平等であるとメメント・モリは説くが、個人の関与できない場所から立ち現れ、基礎疾患や体質、居住国に左右される現代の死は平等だろうか。

Hector Falcon

Tatami View

This is a piece that must be mounted on a tatami and offers viewers the possibility of interacting with it, generating different compositions and allowing the viewer to collaborate with the artist. This piece was designed for mobile spaces that are part of traditional Japanese architecture



Natsuki Takauji

高い山に深まる谷、水は流れ、光が包む

小説や詩を書いていた渡米前の自分。亀山の保つ日本の原風景と歴史。災害など苦難を乗り越えていく日本を私は15年前渡米してから遠くから見守ることしか出来なかったという心情。そこから今作品が生まれた。

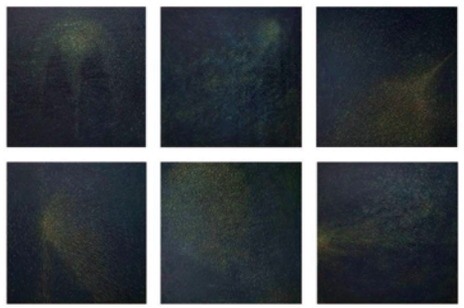
Daniel Jhon Gadd

Protector

Daniel John Gadd is an artist living and working in New Jersey, USA. His work blurs the boundaries of painting and sculpture, abstraction and figuration, and “high” and “low” art, creating work that expresses a range of human emotion; at once violent, fragile, sensitive, fierce, vulnerable, and compassionate.

Etty Yaniv

Islands



Comet in the night
Colorpencil, ink, oil and paper on wood, 12x12inch x 6, 2012

Xiaowei Chen

Comet in the night

In order to simulate the trajectory of a comet, I applied various colors and oils layer by layer on the rice paper until the color turned black, and then scraped off the color layer by layer with a knife. Let various colors reappear on the surface through black, thus forming the "tears" tearing the night that the viewer sees now - [Comet in the night].

小林園実

Multiverse
森羅万象

ニューヨークと亀山市内で採取した植物の葉や花を曼荼羅の形になるように並べ、それをサイアノタイプという古い写真の原型になった日光写真の手法を使って作品を制作し、旧佐野家に約100点を上から糸で吊るし展示ました。

William Norton

waterfall

The piece I created and exhibited for this year’s Kameyama Triennale was different than what I initially intended to show. I was originally going to show a very political work. But upon seeing how beautiful the exhibition venue was, I decided to show one of my new waterfall paintings instead. This painting fit the environment much better than the political artwork I was going to originally exhibit.

Yukari Edamitsu

Catch the Sun

星や太陽、月、室内の光を撮り続け、そこから 絵画や写真作品を展開してきました。「Catch the Sun」は朝太陽がはっきり見える窓から、人間の手と太陽だけをとった一連の連続写真です。古代からあるものだけが作品の中に存在します。

三本木歓

まっすぐに、みえる像

江戸時代の河川改修工事及び平成の発掘工事で発見されたミエゾウ(足跡)をもとにイメージが展開していく。異なる時間軸を行き来して「私」はかつてこの場所で起こったこと、そしてその風景や存在の痕跡を辿る。

展示作品

亀山市文化会館

Quabala Quabala

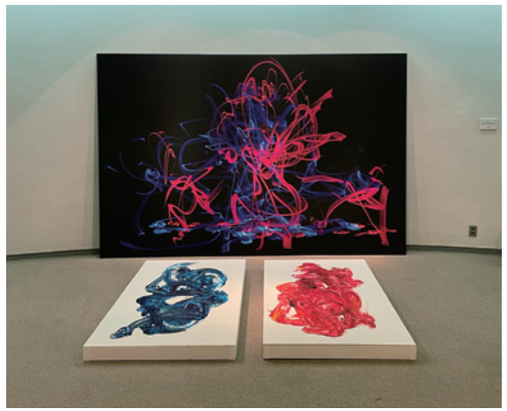
追憶の子守唄
Lost memories

『生と死』をテーマに母子の命を繋ぐ臍の緒の音を録音し、奇跡のような循環の中で生かされていることを作品の象徴としました。ここ亀山との出逢いも必然であり、素晴らしい機会をありがとうございました。

田島悠史

Names

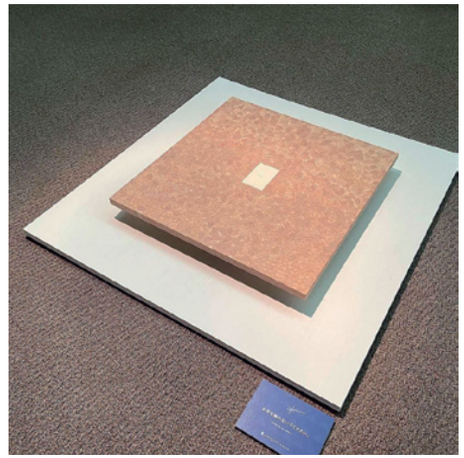
2010年のアート亀山参加から数えて、12年となりました。年月は、社会だけでなく、自己も大きく変わります。それでも、作品をつくる喜びはなかなか絶えないものだな、と自分自身驚きました。次も機会があれば、ぜひ。



辻將成

YAKUDOU
-self portrait-

この作品は作家自身の踊りを視覚化したポートレートであり、
長時間露光(10秒間)で表現された写真と、ペインティング。
一瞬の行為を想起させ、身体の可能性・イメージが広がるような作品を目指した。



内藤久嗣

《The Great Cherry Blossom 》

「人の美しい行為を表したい」
奈良県の吉野山を訪れ、桜に魅せられた私は誰かに伝えたくなった。その想いを桜の和紙に込めて贈った経験が根源にある。
後に百人一首の二十四番に同じ行為が描かれていることを知った。

田村公男

「亀山三部作」

「亀山・カメヤマ・KAMEYAMA」というタイトルで初回トリエンナーレから亀山の風景を出品し続けています。
小生、「現代アート」の作家ではありません。でも「現代の作家」の一人でもあるのです。

亀山トリエンナーレ2022開催催向けて

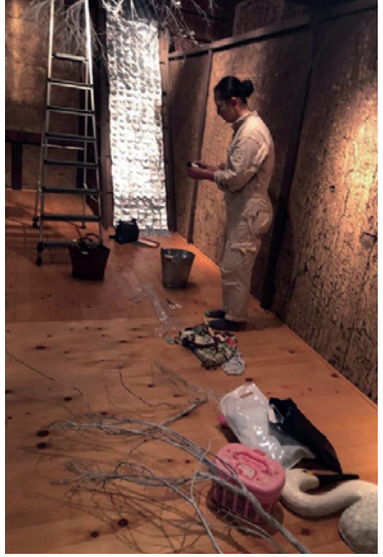
現　地　説　明　会

2019.10.18

亀山トリエンナーレ
2022

リ　サ　ー　チ

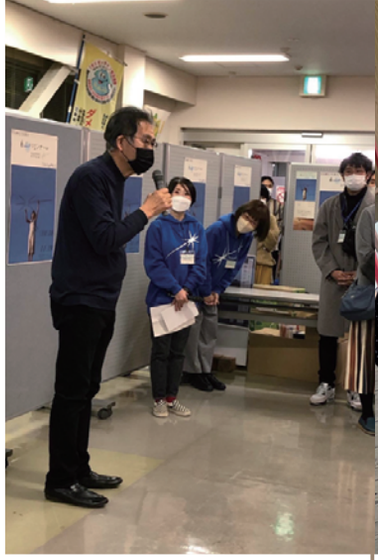
2020 ~ 2022



亀山トリエンナーレ2022開催

搬　入　・　展　示

2022.10.28 - 29



南　條　史　生　さん

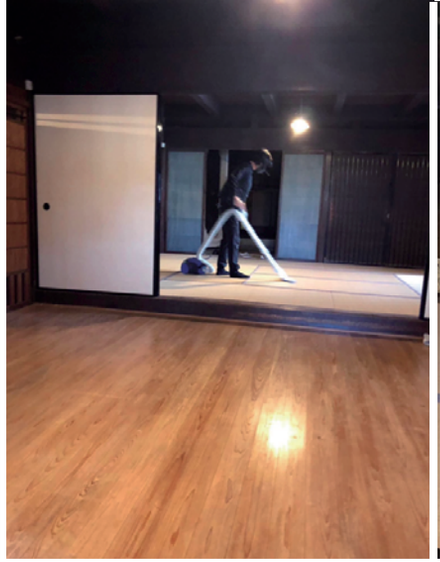
オープニングレセプション　2022.10.29

会 期 中 の 光 景 - 1

2022.10.30-11.19

会 期 中 の 光 景 - 2

2022.10.30-11.19



搬 出 ・ ク ロ ー ジ ン グ

2022.11.19 16:00 ~

亀山トリエンナーレ賞
Kameyama Triennale Award

sealed[封] ● 奥田誠一 Seiichi Okuda

家老の邸宅であった旧加藤家の庭に展示された奥田誠一の作品は、土と芝生が素材であり、“ 土を編む ” というコンセプトは、庭の空間と見事に調和している。素材の性格上、作品は常に変化しており、“ 時 ” の流れを実感させる。自然の重要性を喚起させるこの作品は、今の時代状況を反映しており、精緻な造形も見逃せない。

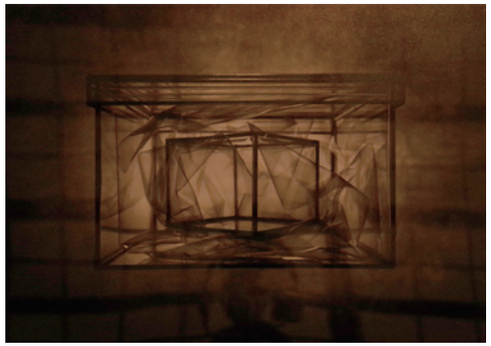
Seiichi Okuda's work, exhibited in the garden of the Former Kato Residence, which was the residence of the chief retainer, is made of soil and lawn. The concept of "weaving soil" is in perfect harmony with the garden space. Due to the nature of the material, the work is constantly changing, and you can feel the flow of "time." This work, which evokes the importance of nature, reflects the condition of the present times, and its detailed modeling cannot be overlooked.

亀山のうつわに空を集める ● 永井寿郎 Toshiro Nagai

旧加藤家・男部屋での永井寿郎のインスタレーションは、SNS やメールで集めた空の様々な画像が、天井から地上に向けて降り注ぎ、地上では大小さまざまな鏡面の球体がこれを受け止める構成。本人が言うところの “SkyCollection”(空の集合体) というコンセプトが見事に実現している。何よりも美しいインスタレーションというのが第一印象であろう。鏡面の球体が収まる器は、本人が亀山市内で集めたもの。トリエンナーレ開催地を念頭に置いた演出も見どころの一つ。

Toshiro Nagai's instillation in the Former Kato Family's "Men's Room" consists of various images of the sky collected via SNS and email, raining down from the ceiling toward the ground, with mirrored spheres of various sizes on the ground receiving them. The concept of "Sky Collection" as the artist himself calls it, has been wonderfully captured. Above all, the first impression is of a beautiful instillation. The vessels that hold the mirror-finished spheres were collected by the artist himself in Kameyama City. One of the highlights is that this is a production created with the Triennale venue in mind.

Soul(魂) ● Omar Torres



豪商・旧舘家の仏壇に展示されている、メキシコ人作家、Omar Torres 作品は、入れ子形式の画像一枚で構成されており、見る側を摩訶不思議な世界に誘う。仏壇と現代美術作品との出会いにより、予期せぬ “ 化学変化 ” が起こっている点も見逃せない。造形的には白黒の、濃淡のある画像が強く印象に残る。

The work of Mexican artist Omar Torres, which is exhibited at the Buddhist altar of the wealthy merchant Kyudate family, consists of a single nested image, inviting the viewer into a mysterious world. We cannot overlook the unexpected "chemical change" that occurs when a Buddhist altar and contemporary artwork meet. In terms of form, the light and dark shades of the black and white image leave a strong impression.

奨励賞
Encouragement Award

ラブレター / 原発ランド ● 花とミサイル河野麻希 Hana to Misairu Kawanomaki

旧舘家での河野麻希の平面は、原発事故をテーマとしているが、作品のタイトル “ 原発ランド ” に象徴されるごとく、重いテーマを遊園地的な視点から仕上げている。アイロニに満ちた作品ではあるが、その訴えかける表現は、メッセージ性に富む。

Maki Kawano's two-dimensional painting at the Former Taichi Residence is based on the theme of a nuclear accident; however, as symbolized by the work' s title "Nuclear Power Land," its heavy theme is completed from the perspective of an amusement park.

kameyama rouge ● 原憲太郎 Kentaro Hara

商店街の化粧品店に展示された原憲太郎のインスタレーション “kameyama rouge” は、“ 場の特色 ” を遺憾なく取り込んだ作品であり、作品の基調である赤い色が印象的。緻密に作りこまれたその作品は、十分な検討と準備の下で制作されたのであろう。

Kentaro Hara's instillation "Kameyama Rouge," which was exhibited at a cosmetics store in a shopping district, is a work that fully embodies "the characteristics of place." The red color, which is central to this work is striking. This meticulously created work has certainly been produced with plentiful consideration and preparation.

めぐる ● 松岡歩未 Ayumi Matsuoka

旧舘家での松岡歩未のインスタレーションは、人間の誕生と死という、重く究極的なテーマを扱った作品で、人の思考回路を静かに、しかし、しっかりと刺激する。刺繍で作られた生まれたての赤ん坊は、時間をかけて制作されており、緻密な作業の跡が伺える。

Ayumi Matsuoka's instillation at the Former Tachi Residence deals with the profound and ultimate theme of birth and death, and quietly but firmly stimulates people' s thinking. The newborn baby was made by embroidery, and the evidence of its meticulous work can be clearly seen.

受賞作の選考 / 講評は、亀山トリエンナーレ監修者：井上隆邦氏

イベント
ワークショップ

亀山トリエンナーレ
2022

特別企画

亀山トリエンナーレ2022特別企画　南條史生講演会

「ローカルとグローバル:ビエンナーレと芸術祭」

10/30(日) ○ 亀山市文化会館コミュニティセンター

ビエンナーレのはじまりと日本の参加

世界各地で、数年ごとに開催されている芸術祭「ビエンナーレ」。1895年、イタリア国王の銀婚式に合わせてベネチア市による企画として始まった。(世界各地の産業、技術、工芸品など)を紹介する万国博覧会に対して、ビエンナーレは、「芸術」だけに特化したものとして登場。会場となるベニスの公園内に各国のパビリオンが建設され、その国を代表するアート作品を展示する形式が定着。ベネチアで始まったビエンナーレだが、第二次大戦後、特にベルリンの壁崩壊後は、世界各地で国際展の開催が増加。東西冷戦、そしてイデオロギーの対立が終焉する中、都市の個性を打ち出す手段としてビエンナーレへの関心が高まり、これが開催数の増加の一因。

日本がベニスの公園内にパビリオン(日本館)を建設したのは、敗戦後間もない1952年。株式会社ブリジストンの石橋会長による資金援助を得て日本政府が建設。日本のパビリオンは、ドイツ・英国・フランスのパビリオンの近く、立地の良い区画に建設されているが、こうした優遇を受けたものも、歴史的には戦前のイタリアやドイツとの“三国同盟”が影響したのかもしれない。日本はパビリオンの開設を契機としてベニス・ビエンナーレに本格的に参加。当時、日本側の参加作家が強く意識したのは、展示作品を巡る他国との違い。こうしたことが契機となり、日本にとって「自分たちのアートはどのようなものか」という視点が強く意識されるようになる。

また、海外の芸術作品に対して、日本の作品は叙情性に力点が置かれていて、コンセプトがないとの議論も起こる。

現代アートの歴史

今日ではアート表現は、彫刻や絵画ばかりではない。「コンセプト」が重要。こうした考え方の始まりは、マルセルデュシャンの1917年の「泉」。ありきたりの男性用便器を展示し、「アートは、このオブジェを『アート』とみなした人々の、目の中にこそある」とマルセルデュシャン。既製品をアートとして出展したのがコンセプチュアルアートの始まり。近代的な精神は、進化が前提であり、最先端がアバンギャルドとされた。色や形を突き詰め、普遍的な価値を創造するムーブメントが起こる。

今年のベニス・ビエンナーレの特徴

今年のベニスは、「多様性」が特色。参加作家の多くは、女性、性別を明確にしない人々、そしてエスニックな国々から出身者だった。また無名作家の作品も主流となっている。今まで主流であった男性や白人作家は減少に転じたのも特色。こうした動きは世界の変化を反映する強烈なメッセージであろう。

今年のベニスのテーマは、「milk of dreams」。英国人作家レオノーラ・キャリントンの著作からの引用。「想像力を通じてだれもが変化し、変身し、別の何ものかになれる魔法の世界」というメッセージ。今年の展示では女性や繊細なものにフォーカスが充てられていた。会場の外側には男性の強烈なアートが、対して内側には女性や繊細なアートが展示されるということが起きた。こうした対比が男性性と女性性の対比を顕にした。尚、日本パビリオン(日本館)では坂本龍一とダムタイプによる展示が設置された。しかし彼らの、テクノロジーを使ったアートと音楽によるムーブメントは、あまり話題にはならなかった。ビエンナーレの全体テーマを的確に読み取って、もっと自分たちの考えを力強く発信することが重要だったのではないか。

エスニックなアートが芸術祭のメインシーンを動かす

5年に一度の現代美術の祭典、「ドクメンタ15」が今年ドイツで開催された。キュレーターはインドネシアのアーティスト・コレクティブ、ルアンルパ。今回のドクメンタでは、従来型の展示方法は採用せず、アートを創作する人々の活動に焦点が当てられていた。つまり活動そのものが“展示”だったともいえる。また、農村の貧しい人々に村の収益を分配する「ルンブン」(LUMBUNG)というインドネシアの互助会的なシステムを取り入れ、アート活動に携わる貧しい人々に収益を分け与えるというコンセプトが打ち出された。こうした展示が契機となり、「ローカルなエコノミックシステムが資本主義のドイツ社会にも必要ではないか」との議論が生じたという。

アジアの台頭とその美術マーケット

93年には韓国がベニス・ビエンナーレにパビリオンを開設。それと共に自国にも大きなビエンナーレ(光州ビエンナーレ)を創始、爾来、今日まで二年に一回の頻度で開催している。海外アーティストとの交流も積極的に展開。日本もこれに倣うべきと、国際交流基金を中心に国際的な芸術祭　横浜トリエンナーレが企画された。2001年に開催された横浜トリエンーレでは、パシフィコ横浜やレンガ倉庫を中心に国内外の作家の作品が展示された。また、「他者と出会う」「異文化と交流する」という体験が重要との認識のもとアーティストによる交流も積極的に行われる。

アジアを舞台とする現代美術の動向では、美術マーケットの問題も無視できない。

アート・マーケットでは一位はアメリカ、二位は英国だが、三位には中国が位置している。インドネシアでもマーケットが拡大中であり、コレクターも増えている。こうした状況に対して日本のマーケットは極めて小さい。

世界の芸術祭の潮流

近年の芸術祭では、ローカルな文脈の中で制作された作品が目立つ。例えば、フィリッピンのある村の民話をもとに描かれた絵画、蓮の葉の上に描かれた漢字の文章など。“ローカル”な作品や動きが積極的に紹介されている。「スタンダードなもの」「みんながわかるもの」といった“普遍性”を追求する考え方からローカルへ。世界の思想の変化がアートの変化とその奥底でつながっている。

アートの未来

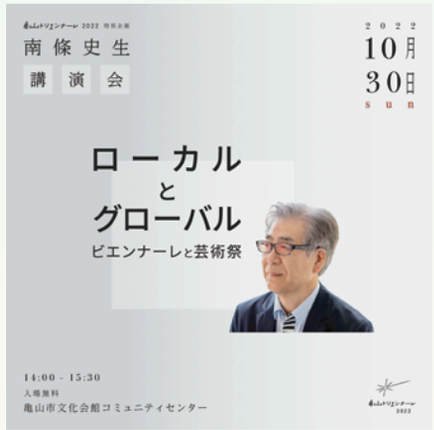
ローカルとグローバルとの行き来がアートの新陳代謝に繋がる。どちらが良い、悪いということではなく、その多様性の中にアートの未来はある。また、文化の刷新では、古いものや、異文化の検証、アートを推し進める技術革新、SDGsなどの地球環境への配慮も重要となってきた。

日本アーティストの海外進出

日本は海外に向けての情報発信が重要。「わかりやすい情報」を常に出し、展覧会を積極的に企画していくことも必要。民間も国もこうした動きを応援することが求められる。日本人アーティストにおいては、パッションをもって作品作りに励み、国際的な作家になろうというアンビションを持って、自ら発信することが大切。日本人アーティストは、言葉で説明することが非常に下手。流暢な言葉で表現する必要はない。何が問題か、なぜ作るのかを自分の言葉で表現すること。80年代当時は、日本人アーティストを海外連れて行っても、しばしば呑んだくれたり、もじもじして何も言えず、国際的な評価には繋がらなかった。海外進出では、コミュニケーションが成立するかどうかが非常に大切。“生き残った”アーティストは、こうしたコミュニケーションを通じて何かを掴んでいる。

亀山トリエンナーレについて

古い建築物の中にアートがあり、古いものとの対話を感じた。展示が生きもののように感じられた。ローカルなものの中に、グローバルなものが並ぶ。多様な作家の作品が息づいている。「美術館で勉強しなきゃ」という感覚ではなく、「次は何があるのだろう?」という好奇心をもって鑑賞できる。亀山という土地の個性と一緒に発展する予感がある。アートは与えられるものではなく、育てていくものだ。行政も応援してほしい。



講演記録 ◯小阪順子(ライター)
文　　責 ◯亀山トリエンナーレ実行委員会

亀山トリエンナーレ
2022

特別企画

亀山トリエンナーレ2022特別企画

山形国際ドキュメンタリー映画祭作品上映

池澤邦仁（伊賀市在住）

1989年に第1回映画祭が開催されて以降、隔年開催の山形国際ドキュメンタリー映画祭。
亀山トリエンナーレ2022では、映画祭で上映された中から次の秀作5本が上映された。
観客が少ないのが残念であったが、見応えのあるドキュメンタリー映画だった。

「自画像：47KMの窓」ジャン・モンチー監督/2019年/中国
山村で老人たちとふれあい、似顔絵を描き続ける少女の姿。

「気高く、我が道を」アラシュ・エスハギ監督/2019年/イラン
牧畜と稲作を営む主人公は、戒律厳しきなかでも仕事の後は女装してダンスするのが生きがい。

「祖国　イラク零年」アッバース・ファーディル監督/2015年/イラク・フランス

ある家族の2年間の記録。戦争がいつの間にか入り込む日常を上映時間334分で描く。

「阿仆大（アプダ）」ホー・ユェン監督/2010年/中国
村の集合住宅で高齢の父親を一人で介護する少数民族の農夫アプダの日常。

「殊勲十字章」トラヴィス・ウィルカーソン監督/2011年/アメリカ
父親が、青年となった息子たちにベトナム戦争従軍の思い出を自宅で語り続ける。

「山形国際ドキュメンタリー映画祭」での工夫

ねこさんこと伊藤幸一（実行委員）

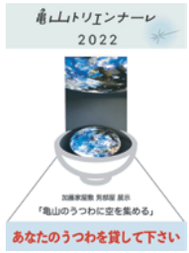
テレビは部屋が明るくても観れるのになぜ映画館は暗くするの？
チコちゃんが言うには黒を忠実に黒くするためだって。
テレビの液晶画面は黒い。しかし映画のスクリーンは映写機からの光を跳ね返すよう白くし部屋を暗くするのである。
亀山トリエンナーレでの「山形国際ドキュメンタリー映画祭」でいかに会場を暗くするか？
窓ガラス全面に農業用のマルチを貼り付けることにした。これは実にうまくいった。
映写機はヤフオクで国産メーカ品があったのでねこの館の財産として落札した。
音響には苦心した。今回の会場は途中で5回ほど撤収が必要でスピーカの据え置きができない。そこでキャスター付きのテーブルに映写機器とアンプ、スピーカをすべて載せることにした。こうしてでき上った手作りの映写システムは延べ24時間トラブルなく役目を終えることができた。

event

「亀山のうつわに空を集める」

うつわ収集ツアー ○ 永井寿郎

11/19 (土) ● 亀山市内各所



ワニといっしょ ○ 山本辰典

10/19 (土) ● 亀山市内各所

亀山モンマルトル 「亀山を描こう」○ 11/3(木・祝) ● 亀山市内一帯

サウンドパフォーマンス

追憶の子守唄 -Lost Memories- ○ QuabalaQuabala

11/3(木・祝) ● 亀山市文化会館コミュニティセンター

ダンスパフォーマンス ○ 辻將成

DUALITY2022KAMEYAMA

11/6 (日) ● 亀山市文化会館コミュニティセンター

この作品では踊りと儀式的な行為について、通過儀礼をモチーフに展開されたパフォーマンスアート。作家の辻將成は亀山をリサーチしながら、土地と空間にダンサーの踊りを展開した。

光とダンス

11/12 (土) ● 東町ふれあい広場

パフォーマンス ○ フォトジェニックドールエトランゼ

毎週土・日曜日+11/3 (木・祝) ● 東町ふれあい広場

ライブ ○ ポンティ新平

毎週日曜日 ● 東町ふれあい広場

guitar painting ○ 宮崎政史

11/6(日) ● 高村書店倉庫

ライブペインティング ○ 波多野友香

10/30 (日) ● おもちゃのナカヤ

映像と身体によるパフォーマンス ○ タキナオ

1/13 (日) ● 阿部家

ダンス | カジヤマテルヨ

music | marucoporoporo

イチョウの古琴 ○ 長谷部勇人

11/19 (土) ● 加藤家屋敷跡

work shop

妖精の扉をつくろう ○ ピカソスイッチ

11/6(日) ● 東町ふれあい広場

骸骨ワークショップ ○ 矢作隆一 / 亀山市立東小学校4年生3クラス

● 2022.9.8/10.13/10.27

work shop

Cafe @亀山

天候に恵まれた今回のトリエンナーレ、カフェ日和が続いて週末のカフェ@亀山にも沢山の人が訪れて頂きました。

今回の出店者も前回に引き続き、美味しさにプラスして、オーガニックやベジ対応可能なお店をセレクトして出店してもらいました。

遠く伊勢市やいなべ市から出店してもらった方もありました。

『beck coffee lounge』さんは四日市から全日程に出店。店主の渡邊慎悟さんはデザイナーでもあり、アートにも深く関心を持たれて居る若者でかつ、地域や人々のハブになる活動をしています。彼に会う為にトリエンナーレを観にきたと言うお客さまも大勢いらっしゃいました。

普段は人通りのあまり無い商店街を沢山の人々が歩き、ふれあい広場で食べて飲んでくつろいで…毎週末こんな感じで人が集うふれあい広場に出来たらなんて素敵でしょう!

アートが町の風景を変え、住民の自尊心を高め、町の暮らしを良くデザインしていく。そんな理想をふれあい広場で想像させて頂きました。

コーディネーター　岡田 香

<Café @亀山>

喫茶TESORO|あんらく|いなべカリー食堂|しゃむ猫庵|BECK COFFEE LOUNGE|moguraya|HOABIN TABLE|やまなみベーグル

亀山トリエンナーレ2022
に寄せて

亀山トリエンナーレ
2022

加藤家屋敷、佐野家、橋爪種苗店にて

加藤家屋敷、旧佐野家、元橋爪種苗店
キュレーション担当 Cake Hara

『歴史』というものは幾重にも時が積み重なって、一つの場に多くの時間がレイヤー状に蓄積しているものと、常々イメージしています。東海道に位置する亀山には様々に残る歴史的建造物があり、今回の展示場所の一つ加藤家屋敷のような建物には様々な箇所にそのような時の痕跡とも言えるものが沢山残っています。例えば、梁に染み付いた深い色と傷、樹齢400年を超える銀杏の木、(おそらく出生の祝いなどで植樹さ れたのではないかと推測されます)、馬屋の空間とその形から感じられる命が存在した事、男部屋の存在、などなど、人それぞれにその蓄積した時を感じる事のできる場所が存在しています。

そして加藤家屋敷には14名、佐野家には11名のアーティストが国内外から集まり、そんな過去からの痕跡や場とのつながりを各々の視点でみつけ、感じ、生み出した現代の表現を展開しました。今回の展示で大切にしたことは、『場の力』をどのように活かすかということでし た。ここには染み付いた歴史の重なりがあり、人類が抗ってきた自然の象徴として幾多の『生と死』が存在し、そして今に繋がる現代社会があります。そんな中での人の営みとは何か、過去から蓄積している場と現代の表現がどのように絡み合い、新たなものを生み出せるのか、芸術とは何か。そんなことをテーマとして設けました。

そのテーマ設定後、想像もしなかった新型コロナウイルスが世界を席捲し、亀山トリエンナーレも二度の延期を余儀なくされ、奇しくも生と死というテーマがより身近なものとなってしまいました。コロナ禍を経て学校に行けなかった空白の3年とか、コロナ黒歴史とか、この数年をネガ ティブに捉えがちである一方で、様々に違う視点を持てたとか、新たな学びの年になったとか結果論的にポジティブに捉えることができた、というのも大切なことではあります。

しかしながら私にとって、人はどんな状況においてもポジティブ思考からしか生きる力を生み出すことができない生物であると感じた3年でした。悩み、模索し、前を向き、そして一歩を踏み出さないと、何も始まりません。そんな一歩を踏み出すことの大切さをヒシヒシと感じた3年でした。そしてここ加藤家屋敷や佐野家に集まった彼らの表現という一歩踏み出した営みが、ポストコロナの新たな時代に大切なものを発見する手がかりをくれると強く感じています。彼らにしか見えないものが具現化されて、考える、感じる、そして次の一歩を踏み出すことの力をくれる、そんな作品が集まりました。

不確実で複雑で曖昧で変動的なVUCAの時代のなかで、違いこそが強みになる多様性の時代でもあります。何をすべきなのか、どこに行くべきなのか、正解や不正解はありません。Think globally, Act locally の精神で、解のない問いに立ち向かうために、さあ、よく見て発見すること から始めませんか?

Norton William (米国チームキュレーション)

Aa a curator for this edition of the Kameyama Triennale I chose a group of eight artists currently living in the United States whose artistic message comes in large part from the materials they employ and not just an image.

These artists employed everything from the local indigenous plant life, to layers of vegetable oils on rice paper, shattered mirrors, the detritus of consumer waste, recycled advertising vinyls, linkages of photographs displaying a value of time and hope, poetry giving resonance to an installation created on site, and miniature paint splattered minimalist chairs.

I was excited to see different themes these individual artists develop from being installed next to each other. Time, cosmology, our own star became very important connective themes between Sonomi Kobayashi, Yukari Edamitsu and Xiaowei Chen. Natsuki Takauji's installation poetically invokes the mountains, rivers and valleys of Japan. I chose to hang my painting of a waterfall instead of a more political piece because it better fit the environment. Etty Yaniv's jewel like paintings employed imagery of landscapes, water, mountain scenes.

Daniel John Gadd presented us with a flesh toned, shattered mirror, broken body of a piece. A vulnerable means of expressing his human condition.

And Chris Ketchie brought modern painting evoking the Jackson Pollock era of American art blending into Japanese culture and history, with his Japanese Thrones.

亀山トリエンナーレ：手作りの素晴らしさ

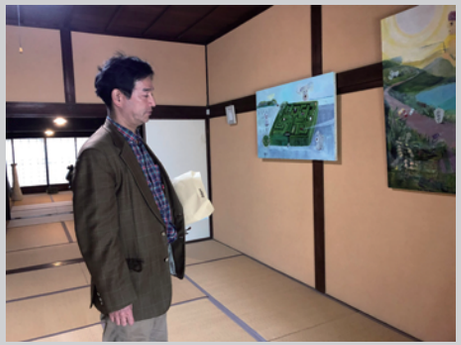
舘逸志

文化の日、森敏子さんのお誘いを受けて、家族で亀山を久しぶりに訪問しました。17年前に父が死去した際に亀山市に寄贈し、市の文化財となった古民家（旧舘家住宅）が、工夫に満ちた現代アートの展示で光輝いて見えました。

アーティストの方々がそれぞれの部屋や空間の特徴にマッチした作品を展示し、まるでそれぞれの部屋、空間が芸術作品の一部となって新たな息吹を与えられたようでした。仏間、仏壇が重厚な額縁となっている作品、荒壁の厨子と人魚たちの明暗、茶室の新たな解釈を教えてくれるような外国人アーティストの作品、光線の影を焼き付けたような床の絵など。

元城代家老加藤家の門や厩、屋敷跡の展示も興味深く拝見した。市民参加型の作品群は、トリエンナーレの展示を住民の皆さんが自分事として楽しむ素晴らしい仕掛けとなっていました。

まだまだコロナ禍の影響が残る中、国内外から93組のアーティストを受け入れて、展示、映像、パーフォーマンス、講演など多彩な活動を展開する祭典を手作りで運営した、実行委員会の皆さんに喝采を贈りたいと思います。



新しい世界との出会い

ボランティア　打田　羽麗（うちだ　うらら）

私は、現在高校3年生でイベント関係に興味があることからボランティアとして参加させていただきました。

主に旧舘家の受付をさせていただいたのですが、「次回はボランティアとして参加したい」と言ってくださるお客さんがいらっしゃるほど素敵な作品ばかりでとてもワクワクしました。

現代アートについて知識の無い私でしたが、作家さんや実行委員さんとお話をすることで、アートを感じることの魅力が少し分かったような気がします。

また、亀山トリエンナーレ2022に参加したことで、普段の学校生活では関わることのできない方々とお話をして新しい世界に沢山出会いました。

若手作家さんの夢、亀山の歴史、世界を旅したお話まで‼どれも私にとっては新鮮で輝いて見えました。

そんな素敵な皆様が創り上げたイベントだからこそ沢山の方から愛されているのだと感じました。

本当にありがとうございました。

これからも皆様のご活躍を願っております。

ボランティア研修会を開催しました。

2021.7.25

2022.10.9

たくさんのボランティアの皆さまのご協力をいただきました。

「亀山トリエンナーレ」に参加して

遍照寺　村林葉子

金毘羅堂の前に木村翔太さんの「二年かかって亀、辿り着く」が展示されました。作品は亀山城の二の丸御殿を本堂とした当寺の屋根の千鳥破風にある亀の瓦から発想された作品です。コロナ禍で延期した間に亀の甲羅に藻がついて「衰亀」となり雲に乗った亀を表しています。その制作の様子を映像に残してその行程を山登りに例えて制作した作品が佐々木樹さんの「山の途中で木村翔太との詩的交歓」です。映像はビバークのテントにみたてたスクリーンに映し出されていました。

当日、展示に来られなった木村さんのために、作品は同じ広島の作家の方が届けてくださり、佐々木樹さんがスマホの「facetime」で話し合いながら展示している姿をみて、芸術で結ばれた絆を素敵だと感じました。

本堂には宮嵜浩さんの「center of the universe」という作品が展示されました。群馬県中之条町にある四万温泉を灯した古い趣のある街灯部分を地元の方から譲り受け、中のフィラメントの電球を入れて「人の心を灯すあかり」を表現して　伊藤若冲の「紫陽花双鶏図」を阿弥陀如来三尊の神々しい金色に写して屏風全体を供花とした作品でした。屏風の中に作者の思いが込められたいろいろな動物や人の顔などが隠し絵のように描かれていて、隠された絵を宝探しのように探す喜び、観に来られた方々と語らう楽しさはとても良い時間でした。本堂の景色に溶け込んで、ずっと前から本堂に置かれているように思える作品で「作品はどれですか」「どこにありますか」と尋ねられることもしばしばでした。

三週間の間に、三重県はもとより全国各地からたくさんの方々が訪れてくださいました。作者さんのコンセプトやお寺のことを説明したりの中で多くの方と語らうこともできました。各地のトリエンナーレを尋ねるファンの方々が多くいることもわかりました。現代アートはわからないと思われる方も多いかと思いますが、芸術に「ふれる」、芸術を「観る」と心が動かされます。心が動くと感情が湧いてきます。身近で芸術にふれる大切な機会を与えてくれるのがトリエンナーレだと感じました。

亀山トリエンナーレに思うこと

高村書店　高村照代

新型コロナウイルスによるパンデミックが起き2年の延期後、前回より5年目の開催となった亀山トリエンナーレ。その間に当店は続く出版業界不況の影響を受け、業務を縮小し絵本中心の店舗にリノベーションしていました。

そんな当店に今回展示を希望されたのは、筑波大学院生でグラフィックスデザインを研究されている稲田和巳さん。亀山市の航空写真上に人口密度の高低差を繊細で美しい潮の流れで表現されているデジタルアート作品『潮』。

棚の絵本の間に3か所、額付きのタブレットで設置されました。絵本の中で作品を探してもらうのも作家さんの狙いだったようですが、馴染み過ぎて気付かれずに帰られるお客様が殆どなので、出来る限りご来店のお客様一人一人に展示場所の案内と、作品の内容を、それが正しいのかは分かりませんでしたが説明しました。ただ説明をさせてもらうと、とても興味深く作品を眺められているのが印象的でした。

お客様の感想でもありましたが、統計データをアートとして表現する発想と技術に“今”を感じ、デジタルが加わったアートの世界は広がっている事を実感しました。

もう一か所店舗から離れた当店の倉庫に、エレキギターを使った、これまた画期的な表現の宮崎政史さんの作品が展示されました。数本のスプレー缶が取り付けられたギターを弾きながら、音程によってさまざまな色が飛び出し描かれていく絵。ご家族にコロナ感染があり、予定より一週間遅れたライヴパフォーマンスは、あまり多くの方には見られていませんでしたが、初めて目にするパフォーマンスを楽しまれていた様子でした。描かれた絵はその不思議なギターと共に、期間中展示されました。

リノベーション後、店づくりに美しい絵本を意識した品揃えを心掛けている当店に、アートを楽しみに来られたお客様には、展示作品と共に、その絵本達と店舗にも大変興味を持っていただきました。

今回のトリエンナーレでは、絵本の売り上げと店舗の知名度にと、驚く程良い影響を与えていただき、当店にとって大変有難い催しとなりました。

作品の展示場所を提供している店舗側と、実行委員会との話し合いの場を今後はもっと密にして、シャッター商店街に賑わいを呼び寄せてくれるアートの祭典を、それぞれの店舗も一緒になって盛り上げて行ける事を望みます。

亀山トリエンナーレとアートの再帰的実践

藤原智也（愛知県立大学 准教授）

亀山トリエンナーレの特徴は、「行政」や「市場」ではなく、「市民」が起点となっている点にある。日本のほとんどの芸術祭は実行委員に政官財界の人物が名を連ね、広告代理店的動員による広報展開と税金依存による短期間の規模拡大を行ない、行政立美術館をメイン会場として、経済効果を優先させている。亀山トリエンナーレは、地元の文化リーダーやアーティストが立案して運営中枢を担い、適正規模の広報展開と過度な税金依存を排した長期間での育みを行い、まちなか展示をメイン会場として、地域社会のエンパワーメントを優先させている。

現代アートを創始したM.デュシャンは、芸術の機能を「思考の促進」と再定義した。その後、現代アートは様々な社会的コンフリクトの可視化や権威主義への批判を主題化し、欧州の芸術祭では市民や専門家が運営委員会を組織してきた。

そこには、近代的な主体性を備えた市民とは行政や市場を制御する側にあるという理解があり、そのためには芸術文化を介した市民の連帯や学びが必要だという認識があった。他方、政官財界によって企画された芸術祭は、検閲や忖度のリスクがつきまとい、「思考の促進」を担保しえない。

日本ではこのような前提を遡る再帰的認識は十分に普及していない。その意味で、市民が育み、これからも育まれていく亀山トリエンナーレの実践は、主体性に基づいた芸術のプラットフォームを真に創造していく稀有な例であり続けるだろう。

亀山トリエンナーレを取材して

中日新聞 亀山市担当記者　横田浩熙

「空間の特徴や歴史などを巡って、作家と展示場所との間で『対話』が生まれている」。森美術館の元館長・南條史生さんが亀山トリエンナーレ開幕前夜にあいさつで語ったこの言葉が、この芸術祭の魅力を的確に言い表している。

昔ながらの商店街、重厚な日本家屋、市民が憩う公園―。「クセ」が強い会場に、これまた「クセ」が強い作品が並ぶ。個性がぶつかり合ってけんかしてもおかしくないのに、調和しているように感じられるのはなぜだろうか。

作品をつくり上げるまでに作家が何とどのような「対話」を重ねてきたのか、想像するのが楽しい。

「寂しくなってしまった商店街に、ひとときのにぎわいを取り戻したい」。開幕前のインタビュー取材で、実行委員会事務局長の森敏子さんが亀山トリエンナーレの趣旨をこう話してくれた。芸術祭の開催期間中、アートであふれた東町商店街。2022年3月に亀山市の担当記者となって以来、何度も通ってきた街並みはとても同じ場所とは思えないほど洗練されていたように感じた。下校中、作品に駆け寄って熱心に眺める子どもたちの姿が印象に残っている。

前身のイベントを含め、今回で9回目を数えるトリエンナーレ。街の人々を取材していると、地元にしっかりと根付いてきていることが分かった。今後も末永く続けていただければと願う。

驚きの芸術祭、亀山にあり

元・新潟市役所水と土の芸術祭担当課長
五十嵐政人

亀山トリエンナーレを見て驚かされた。まず、作品の質の高さ、地域や周りに調和しているとともに、普遍的な美や面白さ、鋭さがあった。新潟でも展示したいと思った。次に、市民主体ということ。市内で長く美術活動をされている森敏子さんというディレクターを始め、スタッフ、アーティスト、商店街の人たちが自主的に活動されている。会場でお会いした人たちは、皆、嬉しそうだった。さらに、亀山という町の魅力。東商店街が断崖にあったり、伝統的建造物や街並が残っていたり、歩いて見ていると実に楽しい。液晶だけではなかった。最後に予算。僕が担当した新潟市の水と土の芸術祭は3億ほどだが、それより二桁は少ないようだ。あまりに少なすぎる。「崖っぷちの芸術祭」と森さん。きっと崩れ落ちることはなく、さらに高みを目指して開催されることを、祈っている。

亀山トリエンナーレを鑑賞して

石黒秀和(岡崎市)

お話を伺ったおもちゃ屋さんのご夫婦、喫茶店のかわいいお母さん、花屋さんに出展されていた作家の方、ボランティアの方などが皆さん、このイベントは実行委員さんのおかげ･･･と言っていたのが印象的でした。
そしてどの方もとってもいい顔をしていらっしゃいました。
営業中のお店やお住いの民家に作品が溶け込み展示されているのも驚きでした。商店街と市民、作家の方々が皆さんいい関係でこのイベントは成り立っているのだなと、つくづく実感しました(途中、小学生の集団が作品鑑賞に来ていたのも印象的でした)。

富良野塾にいる頃、倉本先生から「創」と「作」の違いについて何度も教えられました。
同じ「つくる」でも、「作」は知識とお金を使って前例に倣って行うこと。「創」は前例のないものを、知識じゃなく知恵で生み出すこと。感動は「創」にしか生まれない。「創る人」になりなさい。
実践することは簡単じゃありませんが、まさに実行委員会の皆さんのやってこられたことは、街や感動を「創る」ことだったのではないでしょうか。

亀山、また、いつか、必ず伺わせていただきます。
ありがとうございました。

亀山トリエンナーレ2022に参加して

亀山東小学校4年担任
竹内真彦　武久実代子　黒田敢大

「トリエンナーレ、めっちゃ楽しい！すごい！」。これはトリエンナーレに参加した子どもたちの言葉です。
このような素晴らしいイベントに亀山東小学校4年生の児童84名で参加できたこと、大変うれしく思います。

メキシコの「死者の日」にちなんだ骸骨の作品を通し、メキシコの文化や、作品作りの楽しさ等、子どもたちも教員もたくさんのことを学ばせていただきました。
メキシコの大学の先生、矢作隆一さんに現地からZoomを繋いで教えていただいたメキシコ文化や死者の日のこと。
森敏子さんをはじめ多くのスタッフの方々に教えていただいた、新聞紙を使った張り子作りや、彩色・配色の工夫。
国内外のアーティストの方々の作品とともに展示された、自分たちの作品を見学した亀山トリエンナーレの鑑賞。

どの活動も子どもたちは目を輝かせながら、進んで取り組んでいる様子がとても印象に残っています。
今回の活動を通じ、子どもたちが「めっちゃ楽しい！すごい！」と感じるような魅力的な活動を続けていきたいと改めて感じました。

参加させていただき、ありがとうございました。

学校ワークショップ参加実行委員
井谷うらん　倉岡としえ
冨松みね子　山田風雅
森敏子

亀山市立東小学校4年生
子どもたちの感想

私は、自分で作った、がいこつを加藤家屋敷に飾ってもらってとてもうれしかったです。
作品を作る時は新聞がうまく貼れなかったり、目の部分をへこませるのも変になってしまったりして心配だったけど、最後は完成できたので良かったです。

トリエンナーレの作品はどれもきれいで全部いい作品でした。心に残る作品がたくさんありました。
亀山トリエンナーレは何度見てもきれいで、亀山トリエンナーレをしてくれてうれしい気持ちでいっぱいです。

がいこつを作ったとき、色を塗ったり形を作ったりする作業が楽しかったです。
またやりたいなと思いました。作品を見に行った時、自分たちの作品もすごいと思ったけど、他の人の作品もすごくきれいで、面白かったです。図工や工作がもっと好きになりました。

トリエンナーレはやっぱりきれいだと思いました。自分の作品もおいてあったので「やったー！」と思いました。
ほかの作品もキラキラしていたし、どの作品からもいろいろな感情を感じました。
本当にトリエンナーレはすごいなと思いました。

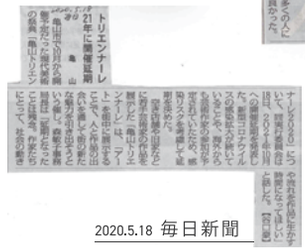
今日はトリエンナーレを見学しました。どの作品もとてもきれいでした。トリエンナーレには前に一回見学に行きましたが、今日は解説があったので一回目より楽しくなったと思いました。
また、亀山トリエンナーレに行きたいです。

報道

亀山トリエンナーレ
2022

新聞雑誌

亀山トリエンナーレ 冊子が完成
プレイベントを記録
2020.5.8
中日新聞


トリエンナーレ21年に開催延期
2020.5.18 毎日新聞

亀山トリエンナーレ2020 プレイベントの記録一冊に
図書館などに設置
2020.5.9
伊勢新聞

注目の芸術祭・アートイベント
BIWAKOビエンナーレ 2020
亀山トリエンナーレ 2020
糸島国際芸術祭 2020
美術の窓
2020.1月号

来年10月に延期 亀山トリエンナーレ
2020.5.31
中日新聞

芸術イベント来年に延期
亀山トリエンナーレ
2020.5.31
伊勢新聞

亀山トリエンナーレ
来年10月10日~11月6日
2020.9.9 中日新聞

亀山トリエンナーレ延期
新型コロナで来年10月に
2020.9.9
伊勢新聞

亀山トリエンナーレ2020
三重・亀山 | 当初会期：2020.10.4-10.31
5.30
開催1年延期を発表
(2021.10.10-11.6)
札幌国際芸術祭記録集
「SIAF2020インデックス」
2021.3.28 発行

ボランティア募集 亀山トリエンナーレ
2021.3.2
中日新聞

亀山トリエンナーレ 10月10日から開催へ
2021.6.25 朝日新聞

メキシコ伝統行事「死者の日」の飾り物
カラフル〝頭蓋骨〟先生に作り方伝授
亀山東小を訪問
亀山トリエンナーレ出展予定 彫刻家・矢作さん
2021.4.27 中日新聞

10月に「亀山トリエンナーレ」

国内外の作家101組総勢110人

2021.6.26
伊勢新聞

4年ぶり 現代美術の祭典

亀山トリエンナーレ 10月10日開幕

2021.6.29 毎日新聞

亀山宿と芸術 融合探れ

作家ら、現地巡り準備

トリエンナーレ 国内外から101組

2021.7.31
中日新聞

2021.9.4
朝日新聞

作品イメージ膨らませる

芸術家ら展示会場下見

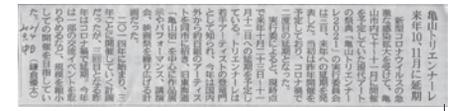
10月「亀山トリエンナーレ」向け

2021.7.13
伊勢新聞

亀山トリエンナーレ延期

来年10月に コロナ感染症拡大で

2021.9.4
伊勢新聞



亀山トリエンナーレ 来年10、11月に延期

新型コロナウイルスの急激な感染拡大を受け、亀山市内で十一月に開催を予定していた現代アートの祭典「亀山トリエンナーレ2021」の実行委員会は、開催を来年に延期すると発表した。

2021.9.4
中日新聞

トリエンナーレ 21年に開催延期

2021.9.21
毎日新聞

来秋に延期 亀山トリエンナーレ

参加予定ダンサー辻さん

11日に代替公演を生配信

2021.10.8
中日新聞

辻さんら17人ダンス披露

オンライン生配信

コロナ影響 亀山トリエンナーレ延期で

「来年は観客の前で踊りたい」

2021.10.13
伊勢新聞

亀山トリエンナーレ2022

美術の窓2021.12月号
「芸術祭へ行こう!」

亀山トリエンナーレ 運営方法について考え始める

2022.4.22
中日新聞

10,11月・亀山トリエンナーレ

ダンサーが会場巡り 動画でPR

薫る歴史 アートの祭り

2022.5.14
中日新聞

亀山トリエンナーレ 準備着々

10月開幕へ向け作家ら

立体や音楽、住民参加型アート

2022.6.9
伊勢新聞

芸術家が作品制作開始

亀山トリエンナーレ出展に向け

2022.9.29
中日新聞

2022.7.16
広報かめやま

亀山トリエンナーレ2022
ボランティアスタッフ募集

2年の延期を経て、いよいよ今秋、亀山トリエンナーレ2022を開催します。国内外のアーティスト95組が市内各所に現代アートを展示します。アーティストの熱い気持ちを感じていただける貴重な機会です。
あなたの力をお貸しください。

活動日　10月30日(日)～11月19日(土)までの期間で都合の良い時間帯

▷午前　午前9時30分～午後1時30分
▷午後　午後1時30分～5時
活動場所　旧観家住宅(西町)
※ボランティアスタッフ専用の駐車場あり
活動内容　展示場所での受付、入場料の徴収など
申込方法　Eメール、電話または直接お申し込みください。
応募期限　9月20日(火)
説明会　必ず次のいずれかのボランティア説明会にご参加ください。
10月9日(日)
▷昼の部　午後2時から
▷夜の部　午後7時から
※2021年度の研修会に参加された人は、参加不要です。
問合先　亀山トリエンナーレ2022実行委員会事務局
Eメール受付：今岡
rhinoceros0426@yahoo.co.jp
電話および直接受付：伊藤
ところ：しばりや(東町一丁目3－4)、☎090－9121－0589

●三重県亀山市
10月30日～11月19日
亀山トリエンナーレ2022
東海道の宿場町である亀山を舞台に、市民が主体となって運営している現代アートフェスティバル。2020年、21年とコロナ禍による二度の延期を経ても年ぶりに開催される。出展作品は公募され、今年は国内外から95組のアーティストが参加予定。国際交流の場、また若手作家の登竜門として定着している。今回は特別企画として山形ドキュメンタリー映画祭のアーカイブ作品上映会、南條史生の講演会なども行われる。
◎加藤家屋敷、東町商店街ほか市内各所　問亀山トリエンナーレ実行委員会
arkameyama@gmail.com

2022.9月号
地域創造レター

みえ人模様

森　敏子さん

アートで街に活力を

2022.10.8
中日新聞

「場」を生かした アート祭典

来月開幕「亀山トリエンナーレ」93組が出展

実行委が詳細発表　商店街や文化財屋敷など43会場

2022.9.30
中日新聞

亀山トリエンナーレ 2022

Richesse 2022/FALL
「EXPERT EYES」

美術の窓
2022.11月号art now

亀山トリエンナーレ
アートで街を未来へ

30日開幕 国内外の若手芸術家ら93組

2022.10.21
朝日新聞

亀山トリエンナーレ2022
※亀山トリエンナーレ2022は亀山市内で開催しています。
会場　亀山市文化会館
料金　無料
主催　亀山トリエンナーレ実行委員会

出展作家展示
日時／10月30日(日)～11月19日(土) 9:00～17:00
※11月19日(土)は16:00まで
場所／市民ロビー・ホワイエ

QuabalaQuabala
「追憶の子守歌Lost Memories」パフォーマンス
日時／11月3日(木祝) 15:30～16:30
場所／中央コミュニティセンター

辻善成
「DUALITY2022 KAMEYAMA」ダンスパフォーマンス
日時／11月6日(日) ①13:30～14:30 ②17:30～18:30
場所／中央コミュニティセンター

KAMEYAMA TRIENNALE
亀山トリエンナーレ
2022
10/30
11/19

令和4年度亀山市文化会館・
亀山市中央コミュニティセンター
11月催物ごあんない

若手芸術家ら93組

亀山トリエンナーレきょう開幕

2022.10.30
毎日新聞

◆亀山トリエンナーレ2022　11月19日まで、三重県亀山市の市中心部一帯。若手を中心に公募する3年に1度の現代芸術祭。国内外の80組が参加。廃旅館や旧銀行跡など歴史的建造物などに作品を展示する。コロナ禍による延期で5年ぶりの開催。「加藤家屋敷跡」と「旧銀家住宅」は共通入場券500円。その他の会場は観覧無料。11～19日にかけて、山崎国臣ドキュメンタリー映画祭で過去に上映された海外の5作品を上映する。問い合わせは実行委員会事務局の森脇子さん＝電090・8950・3011へ。

2022.10.31
中日新聞夕刊

トリエンナーレが開幕

亀山に5年ぶり アートの祭典

2022.10.31
中日新聞

色鮮やか 頭蓋骨模した置物

トリエンナーレ 亀山東小の児童ら出品

メキシコ伝統行事テーマに

2022.11.2
中日新聞

2022.11.18
中日新聞

個性豊かな 絵画や彫刻

亀山トリエンナーレ 5年ぶりで盛況

2022.11.1
中日新聞

命の物語 舞い聴かせる

難病抱えるパフォーマーfanacoさん

亀山トリエンナーレ きょう公演

2022.11.3 中日新聞

亀山トリエンナーレ 受賞6作決定

3人に最高位「作家の質向上、高い完成度」称賛

2022.11.19 中日新聞

紙アート 芸術祭後も展示

2023.1.28
中日新聞

回顧'22 鈴鹿亀山 【中】

主催者ら開催への思い熱く

亀山で3年ぶり行事 続々

■紙面で紹介した鈴亀地域の主な話題■
【5月】
▽伊勢型紙職人が伝統文様生かし小型水筒開発
▽薬物犯罪の「芽」ケシ栽る、鈴鹿の園児お手柄
▽1950年生まれの還暦同期生6人が合同作品展
▽鈴鹿産の冷凍グルメ多彩、地元商店に鬼り場
▽わが町は元、前、現ともいいそべとしお」会長
【6月】
▽実家→ゲストハウス、亀山出身男性が準備中
▽亀山でサルの群れ出没、初の人的被害も確認
▽鈴鹿に新道一家、井上さん親子5人で計30段
▽負けない宣言で勇気を、鈴鹿大生が動画配信
▽鈴鹿の脚本家神久文集、教員時代の同僚らが
【7月】
▽関本店主が所有地3000平方に日本庭園整備
▽IT企業がギョーザ店、システム開発兼ねて
▽3年ぶりに関宿紙風夏まつり、山車が街練る
▽亀山で地下壕2カ所見つかる、旧海軍関係？
▽鈴鹿・天栄中生9人が電池車レースに初挑戦
【8月】
▽鈴鹿医療科学大生がラグビー選手に栄養指導
▽老舗はんこ店主の遺作「辞字」250点展覧へ
▽3年ぶりの8耐、県勢トップはTSR10位
▽元ホンダ社員が調理カーで第二の人生快走中
▽鈴鹿、亀山市がお得なデジタル商品券発行へ

2022.12.27
中日新聞

TV ラジオ

共同通信社・取材
2022.10

FM三重「マジックアワー」
2022.10.28

三重テレビ　「ニュースウィズ」
2022.10.30

亀山市行政チャンネル
「マイタウンかめやま」
2022.11.4-10

ZTV「Osyastagram」
2022.11.24-30

広報

印刷物

ポスター

山形国際ドキュメンタリー映画祭
作品上映チラシ

ボランティアスタッフ募集チラシ

チラシ

南條史生講演会チラシ

入場券・招待券

公式マップ

亀山トリエンナーレ2022の歩き方

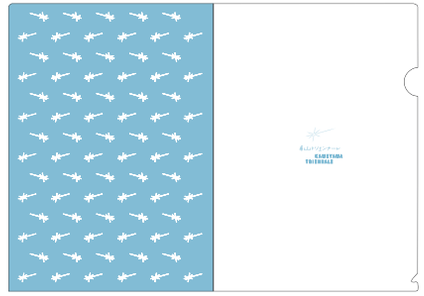
フラッグ

公式グッズ

スタッフパーカー

アクセサリー
小倉咲穂制作

クリアファイル



亀山トリエンナーレ羊羹
生甘堂謹製

亀山トリエンナーレ
2022

亀山トリエンナーレ2022
開催までのあゆみ

2019

4月 - 8月 亀山トリエンナーレ2020コンペティション開催

9月 審査後、結果報告

9月15日 - 12月15日 亀山トリエンナーレ2020プレ企画開催

10月19日 / 10月27日 現地説明会開催（展示場所決定）

2020

5月 亀山トリエンナーレロゴマーク決定

5月 亀山トリエンナーレ2020コロナ禍により2021年に延期決定

2021

4月 亀山トリエンナーレ2021開催記者会見

7月 亀山トリエンナーレ2021ポスター・チラシ完成、発送

7月10日/11日 作家相談会を開催

7月25日/8月31日 ボランティア研修会開催

8月31日 再延期決定

10月 亀山トリエンナーレ2022に向けてPR動画制作（Youtube）

9月23日 KAST（亀山アーティストスペシャルトーク）オンラインにて開催

10月29日 実行委員会にて亀山トリエンナーレ2022の開催日程を決定・発表

2022

4月 出展作家93組最終決定

6月 亀山トリエンナーレ2022のポスター等発送

9月 亀山トリエンナーレ2022開催につき記者会見

10月9日 ボランティア研修会開催

10月30日-11月19日 亀山トリエンナーレ2022開催

亀山トリエンナーレ2022を終えて

今、思いだせるのは見事なまでの青い空。
その青空に青いフラッグが旗めいて。
mapを手に人たちが、続々と商店街を歩く。
ああ、私が夢にまでみた光景が今、目の前に現実となって現れている。
そう思った一瞬、熱い思いが込み上げてきた。

2019年9月15日から開催した「亀山トリエンナーレ2020」のプレ企画。亀山市協働事業として開催。行政と協働で企画、運営した。
青木倉庫と商店街のなかや化粧品店での作品展示。さまざまなアートイベントの開催。
その後、2020年のノミネート作家が亀山に参集し現地説明会を開き各自の展示場所を決定した。来るべき2020年に備えて実行委員会も活発に活動。
翌年2020年2月頃より世界的パンデミックに。
5月に1年延期を早々に決定する。

1年延期後の2021年4月。記者会見をして「亀山トリエンナーレ2021」の開催を発表。
各作家からの展示プランも出揃い、ポスター、チラシも印刷。
南條史生氏とも講演会の打ち合わせも終えて、、、。
実行委員全員でチラシ、ポスターの枚数を数えて封筒に入れ、各関係機関に発送をしたのが7月。
その頃、コロナ禍はますます深刻さを増していった。
最終的に監修の井上隆邦さんと相談し、8月末に再度の延期を決定した。
辛かった。悔しかった。

9月、木原圭さんの呼びかけで、出展作家、実行委員をオンラインで結んで話し合った。
KASTと名づけられたこの会議の中での作家の発言に心打たれた。
「パンデミックという経験は自分自身に与えられた時間と捉え、永い時間をかけてゆっくり作品の構想を練ります。」
私たちには時間が与えられたのだと気持ちを切り替えた。
そんな中でも実行委員会を開催し、みんなで懸案事項を話し合った。

2年の延期を経てやっと開催された亀山トリエンナーレ2022。
93組のアーティストたちが亀山市内42ヶ所に作品を展示した。
2022年10月29日に搬入、展示。その日も青空が広がる良いお天気。
Norton .Wさんは、1ヶ月以上亀山に滞在し、キュレーション、展示作業等に大活躍してくださった。
また、NYから小林園実さん、高氏奈津樹さんも来日され、現地制作の作品を展示された。
アメリカ社会で活躍される日本人女性アーティストの存在を嬉しく思った。
メキシコからは矢作隆一さんも来日され加藤家で展示を行った。
日本各地から駆けつけたアーティストたちも、それぞれの「場」に自身の作品を展示した。
展示に取り組むアーティストたちの真剣な現場を見て、やっと開催できる喜びがじわじわと私の中に湧いてきた。
展示終了後、簡単なオープニングを開催した。
和気藹々と南條史生さん、井上隆邦さんを囲んで記念撮影。
みんなの笑顔が素敵だった。
10月30日の初日。
南條史生講演会開催。前日に南條さんには会場を廻っていただいた。(全会場を廻れなくて申し訳ございませんでした)質疑応答の時間に私は思い切って質問した。
「亀山トリエンナーレ2022をご覧になったご感想はいかがだったでしょうか?」
南條さんは「小さな芸術祭ですが生きている。まさにナマモノという感じがした」と答えてくださった。
その言葉はとても嬉しい言葉だった。
今を生きるアーティストたちが今の自分を表現している証だから。
また、作家が運営に携わる実行委員をしている事、驚くほど低予算である事に驚かれ、「亀山は起伏に富んだ地形が魅力的な街ですね。」と話してくださった。

開催期間中、雨の日は一日だけ。
好天に恵まれた。
私たち実行委員は青いスタッフパーカーを着て3週間街を走り抜けた。
私にとっては、思いがけない多くの人たちが突然、会場に現れてくれる喜びで、毎日が幸せだった。

ある芸術祭の事務局の方が来場され、私に次のような言葉を残してくださった。
「作品が盗難にあったり破壊されないのが素晴らしい。地域と芸術祭の連携が無意識に作品を守っているのですね。」
この言葉は本当に嬉しかった。

素晴らしい作品を展示していただきましたアーティストの皆さん、ありがとうございました。
監修の井上隆邦さん、ゲストの南條史生さん、地域の住民の皆さん、メディアの皆さん、亀山市の行政の皆さん、ボランティアの皆さん、Cafeにご協力いただいた飲食関係の皆さん、ワークショップに参加してくださった子どもたち、ありがとうございました。そして、来場者の皆さん、ありがとうございました。
実行委員の皆さん、おつかれさまでした。

2007年から手探りでやってきたアートによる街づくり。
2008年～2013年「アート亀山」開催。
2014年、2017年、2022年「亀山トリエンナーレ」開催。

亀山の歴史文化を肌で感じ、地域を見つめ、街の未來をみんなで考えるきっかけになったことと信じています。

いたらない事務局長で皆さま方にはご迷惑をおかけしたことと存じます。ご協力、心より感謝申し上げます。
ありがとうございました。

亀山トリエンナーレ事務局長
森 敏子

ご協賛いただいた皆さま（順不同・敬称略）

公益財団法人 岡田文化財団
エア・ウォーター株式会社
亀山市
東町商店街振興組合
清水美保子
猫の館伊藤幸一
野間秀一
コミュニティcaféぶんぶん
café@亀山出店者の皆さま
匿名1名（亀山市東町在住）
子ども絵画教室アトリエエピ
しぼりや

お世話になった皆さま（順不同・敬称略）

監修

井上隆邦

実行委員の皆さま

井谷うらん
市川雄康
大岡英介
倉岡としえ
倉岡雅
Cake Hara
鈴木幸永
田村公男
辻将成
堂本清文
長縄功太郎
藤田昌久
松岡歩未
森博幸
山田風雅
市川英司
伊藤幸一
今岡翔平
岡田桂織
小倉咲穂
小菅まみ
冨松みね子
西川真紀
野間和治
服部智貴
福沢みゆき
豊田元洋
伊藤峰子
森敏子

写真・動画撮影協力

瀧本麻須美
Nakaya Kouji
Edy Fujikawa
一見政幸
北村研太
森敏子
亀山トリエンナーレ実行委員

展示場所をお貸しくださった皆さま

高村書店倉庫
ベルハンター亀山スズキ
シャトー
法因寺
元はんの清水
プランタンさかきや
元写真のトヨダ
森本薬品
化粧品のなかや本店
原田帽子店
おもちゃのナカヤ
阿部家
JDスタイル
トヨダ倉庫
肉のむかい
元丹波屋
元中村こんにゃく店
高橋家シャッター
元アートスペースkusukusu
小林㊧時計舗
喫茶佳
高村書店
しぼりや
崖の上古民家
青木倉庫
三村家
山形屋酒店
遍照寺
元ユリ理容院
廣森家
元橋爪種苗店
岡田屋本店
照光寺
亀山市

デザイン協力

井谷うらん
市川英司
櫻井大吾
松岡歩未

Special Thanks

高北幸矢
小阪順子
Yuri Williams
亀山市市民協働センター
の受付の皆さま
亀山市職員の皆さま
野間秀一
岡田香

亀山茶提供

伊達製茶

ボランティアの皆さま

横山 典子
近澤 恵梨
渡瀬 恵子
黒江 めぐみ
鷲尾 敏美
中谷 典子
松本 恭子
小倉 美恵
益川 怜紗
福島潤一
木下 啓生
相馬まゆみ
岡恭子
打田羽麗
髙尾 佳代子
儀賀 一成
川崎 志帆
西村 彩花
古市尚子
西川真紀
浦野千絵
山内良典
林千代
金子 誠子
栢本 諭加里
川原田洋子
波田琴葉
小阪一
岡本博

編　集　後　記

今こうして記録誌の編集をしていると、この3年間の出来事が思い起こされます。現地説明会を実施したのは2019年の10月。その時はまさか2年も延期になるなんて夢にも思いませんでした。

1度目の延期を決定した2020年は、正体のわからないウイルス、先の見えない状況に絶望感すら感じていましたが、今は延期になって良かったと心から思えます。その間、平和な毎日の儚さを実感し、命について考える時間が自然と増えました。

また、私事ですがこの2年の間に結婚、妊娠、出産を経験したことも作品に大きな影響を与えました。

そして迎えた開催初日。驚くほど大勢の人が亀山トリエンナーレ2022を楽しんでいて、それも老若男女、市外・県外からのお客さまもたくさん来ていただきました。お天気も味方し街は生き生きと輝いて、、、私は嬉しくて毎日のように会場内をベビーカーを押してかけ歩いていました。

そんな夢のような時間も終わり、街に日常が戻りましたが、今でも街を歩けば昨日のことのように光景が甦ります。それほど濃密な時間でした。

最後に、記録誌の完成までに長い時間がかかってしまいましたこと、心よりお詫び申し上げます。

それでは、またお会いできる日を楽しみにしております。

亀山トリエンナーレ実行委員　松岡歩未

亀山トリエンナーレ 2022

主　催　亀山トリエンナーレ実行委員会
監　修　井上隆邦
事業協力　亀山市
助　成　(公財)岡田文化財団
　　エア・ウォーター株式会社
　　亀山市東町商店街振興組合
後　援　(公財)亀山市地域社会振興会
　　亀山商工会議所
　　(一社)亀山市観光協会
　　山形国際ドキュメンタリー映画祭

http://kameyamatriennale.jp/

H P　Facebook　instagram

亀山トリエンナーレ2022記録誌

発行日　2023年5月31日
発行者　亀山トリエンナーレ実行委員会
事務局　三重県亀山市阿野田町1060
編　集　松岡歩未
　　森敏子
　　伊藤峰子
　　大岡英介